

<シンポジウム記録>

京都文教大学臨床物語学研究センター 2023 年度公開シンポジウム
「中国古典劇にみる物語と人間ドラマ～元^{げん}雜劇^{ざつげき}の魅力に迫る～」

林 雅 清・後 藤 裕 也
西 川 芳 樹・平 尾 和 之

【概要】本稿は、2023 年 7 月 1 日（土）13:00～15:00 に京都文教大学弘誓館 G102 教室で開催した、京都文教大学臨床物語学研究センター 2023 年度公開シンポジウム「中国古典劇にみる物語と人間ドラマ～元^{げん}雜劇^{ざつげき}の魅力に迫る～」の記録である。

本シンポジウムは、まず中国近世白話文学を専門とする後藤裕也（目白大学外国語学部准教授）による基調講演「人間ドラマの宝庫、元雜劇作品の世界観」において、元雜劇の概略について中国文学の流れを踏まえた上で解説し、元雜劇という、中国の元^{げん}の時代に盛んに演じられた大衆向けの芝居の台本に描かれた、物語の多様性について紹介した。続いて、同じく中国近世白話文学が専門の西川芳樹（関西大学等非常勤講師）による「兄弟の絆～「虎頭牌」劇に見える女真族の世界～」、および中国近世通俗文学と仏教を専門とする本センター所員の林雅清（本学こども教育学部教授、当時准教授）による「酒と仏と男と女～仏教劇「忍字記」「東坡夢」と才子佳人劇「瀟湘雨」「鴛鴦被」の物語～」と題する元雜劇の個別作品の話題提供を経て、後藤・西川・林に本センター長の平尾和之（本学臨床心理学部教授）をパネラーに加えたパネルディスカッションと、会場からの質疑にパネラーが応答するフロアディスカッションを実施した。なお、本シンポジウムのコーディネー

ター・司会は林が務めた。

700 年以上前の異国の芝居「元雜劇」、そこに描かれた多様な人間ドラマを知り多角的な視点から分析することによって、臨床物語学分野と中国文学分野に今後様々なシナジー効果を生み出すことを期待し、以下に本シンポジウムの全記録を報告する。

※

林：ようこそお越しくございました。京都文教大学臨床物語学研究センターの公開シンポジウムです。私、こども教育学科の林と申します。私のほうから、今日はプレゼンさせていただきます。どうぞよろしくお願いします。

今日は公開シンポジウムということで、学生の皆さんと教職員の皆さん、それに地域の皆さんにもご案内しまして来ていただいているかと思います。このチラシ、うちのセンターの職員さんが作ってくれて、何も言わずにこれができきたんですけど、実はこのイラスト、『元曲選』という本を開いてるんです。このテキストと色も一緒なんですよね。たまたまなんですけど、すごいなと思って。今日はこのテキストからもちょっと挿絵を入れたりして、皆さんに紹介していこうと思っています。

さて、「中国古典劇にみる物語と人間ドラマ～元^{げん}雜劇^{ざつげき}の魅力に迫る～」、元雜劇って何ですか？という話も含めて、早速ですけれども、今

日は東京の目白大学外国語学部から後藤裕也先生にお越しいただきまして、最初に基調講演をしていただきたいと思います。その後で、もう1人、西川芳樹先生と、私のほうから、いろんな元雑劇という中国の古典のお芝居のお話を紹介して、皆さんでいろいろと討論といいますかね、意見交換をしていけたら、うれしいなと思います。では、少し長丁場になりますけれども、2時間、よろしくお願いします。

それでは後藤先生、早速ですがよろしくお願いします。

基調講演

「人間ドラマの宝庫、元雑劇作品の世界観」

講師：後藤裕也（目白大学外国語学部 准教授）

後藤：こんにちは。目白大学というのは東京にある大学なんですけれども、そこの外国語学部中国語学科に勤めております後藤裕也と申します。よろしくお願いします。ありがとうございます。目白大学とって、東京からやって来ましたって言ってますけれども、実はこの4月から赴任したばかりなので、僕はもう生粋の大阪人でございます。なので、いまは関西弁に囲まれて、実家に帰ってきたような気分です。

今日は、こういうテーマでシンポジウムをするからと、林雅清先生からご案内いただいて、ちょっと元雑劇というものについて紹介してくれないかということで、僭越ながら、元の時代のお芝居なんですけれども、それが一体どういうものなのかということを、まず皆さんにお話しします。それから幾つかの物語を紹介して、中国では昔からこういう物語が好まれたり読まれたり、あるいは演じられたりしていたんですよということを、皆さんと共有できたらなというふうに思っております。

で、お手元のほう、資料ですけれども。ちょっとこれ、僕のは大きいんですけど、皆さん、ポケットサイズになってるかもしれませんが、こういうサイズの折り込みのやつになってると思います。情報量といいますか、お芝居の脚本の部分結構、打ち込みましたので、その辺り、文字がちょっと小さくなって見にくいというお声があるかもしれませんが、今日はご了承いただければなというふうに思っております。もう1つが今度はA3のほうで、今、画面に映ってるスライドの一覧ということになっております。ちょっと視線のほう、スライドを見たり、お手元のプリントを見たりってということで、忙しくなるかもしれませんが、ご容赦ください。

それでは、お話のほうを始めさせていただきますと思います。今日の内容ですけれども、まず初めにちょっと自己紹介とか、その他、紹介させていただいて、それから大きくは元の雑劇という元の時代のお芝居、これについてザックリと説明していきたいと思います。それから、その作品の中でどういった世界が描かれているのかというのをほんの少し、もうほんとにほんの少しなんですけれども、ご紹介してって、最後にまとめ。ですが、まとめと言うには自分の中でもまだまとまっていない部分があるので、その辺りはぜひ講演の後にフロアの皆さんとお話し合えればなというふうに思っております。

まず、ちょっと自己紹介させていただきますので。専門は中国近世の白話文学です。近世っていうのは、中国だと唐の時代は結構有名かと思いますが、その後、宋・元・明・清というふうに王朝が交代して続いていくんですけども、大体その宋・元・明・清あたりを近世と言ったりします。最後の清の時代はもう近代に入ってきたりするんですが、大体、宋・元・

明という、その時代の白話文学ということです。白話ってというのは話し言葉です。書き言葉と話し言葉っていうのが、中国語は結構違いがありまして、話し言葉で書かれた文学作品というのをメインに扱っております。日本でも有名な『三国志演義』っていうのはその最たるもので、それから林先生のご専門の『水滸伝』なんかは、もっと話し言葉を究めた、そういう作品になっている。それから、元の時代のお芝居というのも研究対象としております。

大阪の関西大学で井上泰山先生という先生に師事しております、この後、登壇される西川芳樹先生と林雅清先生も同門の先輩・後輩という関係になっております。一応、僕が一番先輩で、お2人が後輩と。現在、この3人を中心に『中国古典名劇選』というタイトルで、元のお芝居をどんどん翻訳して一般社会に広めていこうという、ちょっとむちゃくちゃな目標を立てて頑張っているところではあります。全10巻予定で、現在3巻まで刊行しております。今言ったように、林先生、西川先生とともに協力してやっているわけです。

で、これはちょっと個人的なものなんですけれども、『三国志』の主人公の1人である曹操という人、この人を主人公にした小説が実は中国で出版されてまして、これが非常に人気を博しております、何百万部という大ベストセラー。まあ、母数が多いのであれなんですけれども、これが全10巻、翻訳をしております。まもなく第7巻刊行なんですけれども。ここに書いてありますように、ちょっと拡大しましょうかね。林先生と西川先生は、協力を仰いだんですけれども、体よく断られてしまいまして、確か先輩やったはずやねんけどなとか思いながら、そういうものなのかなというふうに思っております。林先生なんかは、「頑張ってやります」って言うてくれたんです。原書まで中国か

ら取り寄せて、林先生のお宅の棚にズラッと並んでるんですけども、「やっぱり無理です」ということで、結局、その他の人と一緒にやったりしてます。

個人的な趣味は読書でして、お薦めは、重松清という作家が非常に有名なので、ご存じの方もおられると思いますが、その中で『その日の前に』という作品が非常にいいので、ぜひ読んでください。今日、これだけ覚えて帰っていたらいいと思ってます。僕は小説を読むのが好きなんですけれども、唯一、涙したのはもうこれだけです。これは本当に個人的な自己紹介という部分ですが。

それで、『中国古典名劇選』というシリーズを今、刊行中なんですけれども。そもそもの始まりは、僕と林先生、西川先生の3人で師匠の井上先生の還暦をお祝いしたいということから始まりました。大学では、よく誰々先生退休記念とか還暦記念とかいって、その先生にいろいろ教えを請うた学生たちが集まって記念論文集というのを出したりするんですが。3人ですし、他の何人か、あといたんですけれども、その当時の僕らのレベルの部分が大きくて、ちょっと論集を出すのは難しいということで、「じゃあ先生の専門である元のお芝居、これを日本語に翻訳して一般社会に広めていこう」となったわけです。それでもって先生へのお礼としようということで、2011年に芳藤林読曲会という、こういう会を立ち上げました。3人で始めたんです。これは1文字ずつ、それぞれの名前から取っています。

で、合宿を繰り返して、2013年に原稿が完成したわけですが、出版事情というのは、昨今厳しいものがありまして、特に研究界隈は非常に苦しい状況になっております。林先生が非常に尽力してくれて、およそ聞いたことのある出版社には手当たり次第に「こういう本を作った

んですけども、出していただけませんか」ということで、手紙を送ったりメールを送ったりして頑張っていたんですけども、なしのつぶて。講談社でしたかね、お返事くれたのは。なので、講談社だけ覚えて帰っていたんで。それでもやっぱり、そういうのはちょっと無理ですと、お断りのお返事を丁寧に頂きました。ちょっと正直もう、このまま出版できないかもというところだったんですけども、そこで、その時に、2016年に橋本循記念会っていう、京都の立命館大学の先生の記念会というものを知りまして。中国の古典を研究する人たちへの助成をしようというのが会の趣旨としてありまして、そこに打診したところ、援助をしていただけたということで、ようやく出版にこぎ着けたという経緯があります。これ表紙なんですけれども、こういう形で『中国古典名劇選』というので、第1巻。長らく、もうほんとに生みの苦しみの末にようやく出たということで、出版した現物が手元に届いた時は、3人で涙ながらに抱き合った、というのは大げさですが、ほんとに思い入れの深い本であります。

これは先ほどとちょっと重複しますが、一番下のほうですけど、今現在はこの3名から少しメンバーも増えまして、多田光子さんと陳駿千君と田村彩子さんという3人、学外のメンバーなんかも入って、相変わらずZoomを使って読曲会、読書会を開いて、訳を作っております。現在、第4巻を準備中で、さっきもちょっと話してたんですけど、何とか2016年の頭には出したいねというような話をしました。ということで、今現在、『元曲選』、これを翻訳して、今3巻まできたというところで頑張っているわけです。

これは何の写真かといいますと、出版社からまとめて送ってきていただけるんです。これ林先生のお寺なんですけれども、そこに集合して、

そこで、みんなで開封の儀式を行って、それでお世話になった先生方に送ったりということをやっているわけです。この辺は全然、関係ないんですけども。これ、林先生。自分の書いた本が出ると、こんなに笑顔になるんだっていう、そういうのがほんとによく出てるんですよね。第3巻は、林先生はあんまり頑張らなかった記憶がありますけれども、それは置いておきまして、こんな感じでやっております。

ちょっとここから真面目なお話に入りまして、中国の文学の流れというのをザックリとお話ししておきます。お手元、レジュメのほう、プリントのほうをちょっとページをめくっていただきまして。中国文学あるいは中国文学史というものは、もういつも一言でまとめられる、そういう言葉がありまして、これが一番上に書いてある漢文・唐詩・宋詞・元曲という8文字。2、4、6、8文字です。8文字で、ひとくくりといますか、まとめて言われる。これはもちろん漢の時代、唐の時代、宋の時代、そして元の時代と。「じゃあ、その後の明の時代とか清の時代、そういったのは何か言い方ないの？」っていうのは、実はなくて。それはなぜかっていうと、明の時代の人、元の時代の次の明の時代の学者がこういう言い方をしたから、もちろん明は入っていないわけです、まだ当時ですから。

で、この言葉が何を表しているかっていうのを、まず簡単に説明しておきますと、漢文、日本語で言う、いわゆる漢文っていうのとちょっと違いまして、漢の時代の文章。漢の時代の文章っていうのは、もう一言で言っちゃうと、司馬遷の『史記』、それからその次に出た班固の『漢書』という、この2つが一番代表的な文章になります。歴史書です。こういったものを散文、いわゆる文章で書かれているということになります。これは『史記』の荊軻の「刺客列伝」っていうところですけど、こういう文章がズラズ

ラッと続いてるという形です。

それから、今度は唐詩。漢文・唐詩です。唐詩ももう、これは日本では非常に親しみ深いものですから、李白、杜甫、白居易とか、そういった有名な人たちがおります。日本では漢詩と呼びますけれども、中国では唐詩（Tángshī）というふうに。唐の時代の詩ということで、唐詩。これはもちろんご存じのように韻を踏みますから、韻文と呼ばれるものです。大きく分けて散文と韻文。韻を踏むか、踏まないかっていう、ここで一番大きく分かれます。ここまでは割となじみがあると思うんですが、この次に出てくる宋词・元曲となってくると、日本ではほとんど知られてないのが現状です。

これ、唐詩の非常に有名な李白の詩、『静夜思』であったり。ほんとはこれだけで1時間ぐらいしゃべりたいんですけども、今日は我慢します。とか、これは杜甫の『登高』という詩です。黒丸、白丸っていうのは音の高さを表してます。一番下、二重丸がついてところは押韻する字です。「哀しい」とか「廻る」とか「来る」とか「台」とか「さかずき、杯」とか、「哀」^{あい}「廻」^{かい}「来」^{らい}「台」^{だい}「杯」^{はい}と、こんな感じで押韻しています。これ、いわゆる日本で習う書き下し文、左のほうに書いていますが、「風急^{うそぶ}に天高く猿の嘯くこと哀し」とかやっちゃうと、意味は分かりやすいんですけども、原文の響きっていうのは全くななくなっちゃうということです。ただ、原文で読むと、全部、押韻なんかもきれいにでてくるということになります。こういったのが韻文です。

その次に出てくるのが宋词というものなんです。見てのとおり、「詞」という字が「言偏に司」なんです。上の唐詩の「詩」とは違います。これは、じゃあどんなものかっていいますと、今で言う、ほんとに歌謡曲です。ほんとに歌なんです。音楽に合わせて、そして歌詞をつ

けて、それを歌うと。もうほんとに今、いわゆる歌番組とかで流れる歌と同じものだと思ってもらって構いません。メロディーに乗せて歌います。それから艶っぽい歌が多いと。女性の美しさであったりとか、あるいは女性の男性に対する悲しみであったり恋心であったり、そういったものがもうほとんどを占めます。これはもちろん文学の一番大きなテーマでもありますから、それは当然といえば当然なんですけれども。唐の時代の詩っていうのは、さっきの『静夜思』とか、ああいうのはメロディーに乗せて歌ったわけではないんです。日本だと詩吟とかありますけども、ああいう詠唱、そういうのはもちろんしてたわけですが、宋词というのはもうほんとに歌です。

これは唐の終わりごろから流行りだしました。メロディーって、もちろん古代中国からずっとあるんですが。宋の時代って、唐の時代ですと版図、領土が広がって、中央アジアのほうとかも唐の領域になっていった。シルクロードとかの貿易とかで、西のほうとの交易も非常に盛んになったと。そうすると、向こうのほうから商人とか、いろいろな人がやって来るわけです。中国本土にはない楽器を持った人たちが、その当地のメロディーを携えて中国本土にやってくる。そうすると、中国本土の人たちは「何だ、この音楽は」っていう、そういうふうにはびっくりするわけです。で、それが一気に流行すると。だから、分かりやすく言うと、ほんとに日本にビートルズがやって来た時みたいな、ああいう熱狂だと僕は思ってるんですが。聞いたこともないようなニューミュージックが流れてきたということで、じゃあ、そこに歌詞をつけて、大流行したというのが宋词です。

これもレジュメのほうにちょっと載せてますが、作者の上にある『昼夜楽』っていうのは、これは曲の名前なんです。内容に対する

タイトルではなくて、メロディーラインに名前が付いてます。『昼夜楽』というメロディーの歌ということなんですが。例えば、この作者の柳永っていう人は、いわば宋词の第一人者なんです。だけど、多分、日本での知名度はほぼないんじゃないかと思います。唐詩でいう李白とか杜甫に当たる人です。だけど、ほとんど知られてないという、そういう現状がちょっとあって、今、日本でも実は宋词をできるだけ広めようっていう動きも、結構前から始まっています。ちょっと内容に関してはあんまり深く触れませんが、とにかく女性の気持ちを歌った歌である

と。
一つ確認していただきたいのが、見てのとおり、文字数がバラバラになってるんです。デコボコしてる。さっきの李白や杜甫の唐詩というのは、1句の文字数が決まってるんです。「5文字、5文字、5文字、5文字」で五言絶句とか、「7文字で8句」で七言律詩とか、とにかく1句の文字数は決まってるんですが、これはもうメロディーに乗せて歌いますから、そのメロディーに合わせて文字の数が変わってくるわけです。メロディーによって、文字数とか、あるいは押韻する場所であったりとか、そういったものも全部違ってきます。かなり複雑になってるんです。

レジュメのほう、途中で1行、間が空いてるの分かりますかね。「^{ことごと}尽く伊に随い^{しかたが}帰り去らんを」っていうところの次です。「尽く伊に随い^{ことごと}帰り去らんを」とあって、1行、空いて、それから「^{せきばくたれ}一場の寂寞誰に憑ってか訴えん」と、こうなってます。これ2回、繰り返してるんです。これは、つまり2番なんです。もうほんとに、だから今の歌だと思っていただいて構わない。内容、訳なんかは、プリントの下のほうに挙げております。またお時間ある時に見てください。

では、いよいよ元の時代に入ってくるわけで

すが。さっきから言ってる漢文・唐詩・宋词・元曲と、この4つのワードの中の最後です。「じゃあ元曲っていうのは何なの？」ということで、実はこれが2つまとめた言い方になります。1つが散曲、もう1つが今日お話しする雑劇というものです。これをひっくるめて元曲と、こういうふうに言ってます。「じゃあ散曲っていうのは、まず何なの？」っていうことで、これは宋词の発展したものです。もうはっきり言って、宋词のままです。そのままです。ただ、より一層、口語、話し言葉、これが多くなってる。その他にも韻の使い方が違うとか、文字数がもう少し緩やかになってるとか、いろいろ違いはあるんですが、本質的には同じものです。これも韻文です。押韻しながら歌っていくものになります。雑劇っていうのは、その歌、散曲を利用した歌劇っていうことになります。

ちょっとだけ、今日は元曲のうちの散曲も紹介しておきたいと思いますんで、レジュメの3ページをご覧ください。今、画面のほうは原文だけ出していますが、ちょっとレジュメのほうでご確認いただきたいんですけども、訓読、書き下し。これも話し言葉になってくると、書き下しっていうのは、ちょっともうやりにくいっていうか、できないんです。

プリントのほうで見ていただきますと、1句目から「^{やつのこと}不甞能^{ひと}で箇^{いいわけ}つ題目を尋^{おも}い得^つく」とか、これ無理やり意味を取りながら訓読していきます。「^{あかり}銀灯を^つ点けて^{ほん}文書を^よ看む^ふ推りをせん^ふ肉の鉄索のごとき^{きつ}夫人に^し緊く^あ纏め^ち住げ^あ被れん^ち又他に^{かのじょ}茶を^い煎れに^い去使得^{いかせ}又他に^{ふく}衣服を^ぬ做いに^ぬ去使得^{ぎやく}倒に^{なん}熬得とか我は先に^{ねむ}睡り去く」と。これ、何を歌ってるか、何となくお分かりですかね。

唐詩は、そもそも全然違うんですけど。宋词も女性のことを歌ってはいたんですが、これ、ちょっと内容を、情景を思い浮かべていただき

たいんですけども、「不甞能で箇つ題目を尋い得く 銀灯を点けて文書を看む推りをせん」、その3句目、「肉の鉄索のごとき夫人に緊く纏め住げ被れん」と。これは要するに男女の夜の営みのシーンです。男と女が一緒にいて、夫のせりふなんですけれども、夫としては、今日は勘弁してくれと思ってるんです。だから、何とか言い訳をして逃げたいわけです。今日はもう、おとなしく寝たいと。で、一つ言い訳を思い付いたと。「あ、そうだ。明かりをつけて、ちょっと読書しなきゃいけないから」と言って、今日は相手できないよと。そうでもしないと、「肉の鉄索のごとき夫人に」って、こんな表現は今までの杜甫とか李白とか、そういう唐詩であったりとか、そんなものにはもう絶対出てこない、そういう話し言葉です。しかも非常に露骨な表現、直截的な表現なわけです。

で、「緊く纏め住げ被れん」と。また慌てて本をひとしきり読んだ後は、「ちょっとお茶をいれに行ってきてくれへんか」とか「ちょっとあの服、繕つてくれへんか」とか何とか言って、妻を布団から追い出して寝ようとしてるわけです。で、「恰三更の前後到睡と 款款的と床頭が擦下れる」と。「不堤防殢酒った夫人が被窩兒の里を搜る」と。「這場事は乾淨せ無這場事は怎で干休せん 唬得た我は盆兒を摸つて淨手の推り」という、何とか言い訳して、「ちょっと小便へ行ってくるから」と言って逃げ出したというような歌が実はあるんです。

僕は文学史の授業なんかでも毎年学生にアンケートを取るんですけども、「中国の文学って、どういうイメージですか」というと、大体返ってくるのは、歴史ものが多いとか。一番多いのは、やっぱり教訓的なものが多いというイメージを中学・高校で持ってくるんです。だから、堅苦しいとか。絶対、そんなことはないんです。じゃあ何でそういうイメージをみんな植え付け

られて大学に来てるかっていうと、それはもう中学・高校の教科書に載ってる漢文が、そういうものばかりよりすぐって出してるからなんです。なので、「実は皆さん、そういうのを読まされてきてるんですよ」と、これが教育なんですよってというような話をいつも文学史の1回目にしたりするんです。「だけど、実はそうじゃないよ」と。確かにこういう内容のものを中学・高校で教えるっていうのは、ちょっとそれはそれで問題もあつたりしますから、難しいところではあるんですけども。だから、「実は皆さんが受けてきた教育っていうのは、もしかして都合のいいように、都合のいい若い人を育てようとして、こういったものを選んで読ませてるのかもしれないよ」というようなことをちょっと最初に言ったりして、「自分で『じゃあ何でこれを読まなきゃいけないの?』とか『これを読む意図はどこにあるの?』とか、ちょっといろいろ考えようね」というような話を最初にしたりします。なので、「実際にはこんなのもあって、すごく楽しいよ」と言うんですけども、何せ中国といって、古典といって、文学といたら、もう三重苦なんですよ。もう今は学生、誰も来ないっていう、そういう非常につらい状態になってますけれども、それは置いて、実は入ってみれば面白い世界がすごく広がってるんですよっていうことは、ちょっと言っておきたいなと思います。こういったのが元の時代の歌としてあります。

レジュメのほう、その下に、ちょっと代表的な作家と作品っていうのも載せてますが。代表的な作家の中で、これ4人、挙げてるんですけども、一番上の関漢卿という人、これが、いわゆる唐詩で言う杜甫、李白に当たる人です。元のお芝居で関漢卿の名前を知らないなんていうのはあり得ないという、そういうレベルの人なので、ぜひ名前ぐらいは覚えておいていただ

ければと思います。

というところで、もう少しどんどん進めていきましょう。じゃあ元の時代の歌、曲っていうのが、そういう話し言葉を使って、ちょっと今までと毛色の違う作品なんかもいっぱい出てきてるんだっていうのは、お分かりいただけたかと思います。実は、宋词っていうのは基本的に1曲1曲、歌って終わりという感じだったんですが、元曲になりますと、一番下に書いていますが、^{とうすう}套数と呼ばれます組曲、要するに曲を連続させて、その中で一つの物語を歌にするっていう、そういった形式が取られるようになっていきます。

ちょっとごめんなさい。今、皆さんのお手元には、これは後で足しちゃったんで、ないと思いますけれども。これなんか、この白抜きになっている部分が全部、曲の名前になっている、メロディーラインの名前になっているんです。だから、こうやって曲を連ねて一つの歌に、長編の歌にしてるということです。そうすると、短い歌だと1つの思いを、ある1人の人のこの時のこの思いっていうのを歌にするっていうぐらいだったのが、こうやって組曲にすることで、一つの長い物語を歌にして上演できると、こういうことになっていくわけです。

例えば、この套数。組曲です。『春恨』という、劉庭信という人。「新水令」という歌から「駐馬聽」とか「喬牌兒」とか「雁兒落」とか、いろいろ歌っていて、これは結局、どういう歌かっていうと、女性が男性に対する思いを歌ってるんですけども、捨てられた女性の思いなんです。これはもう宋词、宋の時代の歌に非常によくある。で、この組曲になりますと、最初から1、2、3、4、5、6、7曲目ぐらいまで、ずっとこの女性が切々と悲しみを訴えてるんです。ですが、それで終わると、ただの今までの歌と一緒にっていうことで、最後の2曲目のほうになっ

てくると、ちょっとこの辺り、例えば「再会を待つこの春に、海棠は咲くもあの人はいれず」、帰ってこない。「きつとあの方は色町に足を向けて、立派な屋敷で宴席に上ってるでしょう」と、こんな感じで歌って。そして最後の1曲です。「もしも帰って来たならば、散々文句を言ってやる」と、「そのへんの女と一緒にしないで」と、「そのときは、ひとをもてあそぶあんたの耳をひつつかみ、裏切り者のろくでなしのその顔をひっぱたいてやるんだ」と、こんな歌になってる。散々ためて、ためて、悲しみを歌いつつ、最後に落とすっていう、こういうような歌が出てきたりします。

こういうのっていうのは、やっぱりそれ以前の時代にはなかった文学の一つの種類なんです。何でそういう歌が出てくるようになったかっていうと、これはもう元という時代がやっぱり一番大きな理由で、そもそもが蒙古族、モンゴル族が統治するようになった時代ということで、今までの固定観念とか価値観がガラッと変わった時代なんです。なので、ちょっと今までにはなかったような歌が出てくるようになりました。

こういった形で歌を組曲にして、そこに一つの物語を入れるということで、そこからやっとお芝居のほうに来るんですけども、歌謡から芝居へということで、散曲、これを組曲形式で使うと。また、口語の使用が大幅に進められるということで、やっぱり話し言葉が使えると、表現とか、情景とか気持ちを非常に細かく具体的に描写できるということがあります。そういった組曲の形式で歌えば、一つの物語を入れるだけのキャパシティーが出てくると。じゃあ物語っていうことは、その中に登場人物が何人かいるわけで、それをそれぞれ役者が1人ずつ、なり代わって、しゃべったり歌ったりすれば、これはお芝居になっていくというような形なん

です。で、元の時代に、こういうお芝居が大流行するということになっていきます。

最後に、元の時代、いったん科挙が廃止されるんですが、それで多くの知識人が、国家公務員試験の科挙をずっと頑張って目指してたのに、試験自体がなくなったということで、じゃあどうすればいいんだってなって、その自分の気持ちをお芝居の創作に向けたっていう。なので、一気にお芝居の作品の質も量も急に増えるという、そういう形で元の時代にお芝居が大流行します。

じゃあ、つまるところ、元雑劇っていうのは何かっていうと、先ほど来お話ししてきた韻文の唐の杜甫や李白の詩、それから宋の時代の歌、言偏に司の詞、それから元の時代の曲、これらは全部、韻文で押韻されてる詩あるいは歌です。プラス、歴史的には司馬遷の昔からあった文章の散文、こういったものが使われる。で、プラス、お芝居ですから、今度、科^{しぐさ}もこれに入ってくる。ということで、実はこれまでに出てきた中国文学のジャンルがもう一緒に全部混ぜ合わさって、その中でえりすぐった、そういった中国文学の精華、ほんとエキスを凝縮してできたもの、これが元の時代のお芝居だというふうに僕は考えています。なので、めちゃくちゃ面白い。だから、唐詩までは皆さんよくご存じだと思うんですが、ぜひ元の時代にはこういうお芝居がいっぱい作られたんだよっていうことを今日は知っていただけたらなと思ってます。

ちなみに中国文学、さっきの唐詩や宋词、それに『史記』とかありましたが、中国文学の中で、一番読むのが難しいというふうに言われています。元のお芝居、これが読めたら、他の中国文学は全部読めるというふうに言われてる。大ざっぱに言うんですけど、確かに、でもそれぐらい難しい。僕自身は難しいから面白いんです、やる意味があって。分かっちゃえば、なん

かそれまでっていう。もう飽き性なんで、それで「もうええか」ってなっちゃうんですけれども、いまだに悩んで、合宿、読書会をしては「ああでもない。こうでもない」と言いながら、そっちの意見がどうかとか。ちょっとけんかになったりした時なんかもあったりしましたけれども、そういうのも乗り越えつつ、今もお互い意見を戦わせてるという状態で訳を作っています。なので、中国文学の、ほんとエキスなんで、元雑劇。今日はちょっとその一端をご紹介しますと思っています。

じゃあ、そのお芝居の特徴ということなんですけれども。まず元の時代のお芝居っていうのは4幕構成です。実際の舞台には幕はないんですが、ですが、一応日本風に言うと4幕構成。これ四折^{よんせつ}というふうに呼びます。プラス、楔子^{せつし}と呼ばれる補助幕が、大体、一番最初とか、途中に入ったりもして、合計5幕ぐらいになります。先ほど言ったような元曲、元雑劇っていうお芝居は、そもそものが元曲という散文、歌を利用したものですから、いわゆる歌劇なんです。一番想像しやすいのは宝塚のミュージカルです。あれを想像してもらって、あんな感じでやってたんやなっていうのが何となく、かなり僕は近いんじゃないかと。あれと吉本新喜劇を合体させたような感じです、分かりやすく言うと。そういうイメージで捉えていただければいいかなと思います。

先ほど言ったように、唱^{うた}、それから白^{せりふ}、それから科^{しぐさ}です。何で宝塚って言うかっていうと、実は結構、役者さんには女性が多かったようで、女性が男性の役をして歌ったりとか、せりふを言ったりとか、そういうのがたくさんあったので。もちろん男性もいますけれども。宝塚みたいに全員女性とか、そういうことじゃないんですが、イメージとしてはあんな感じ。だから、女の役者さん同士が男と女になって恋愛のお芝

居をするとか、そんな感じでいいです。

この辺はちょっとあんまり詳しくは触れませんが、男役の「末」、女役の「旦」という呼び名があって、それぞれに主役を表す「正」とか、脇役の「外」とか、老け役の「老」とか、そういった役柄に対する呼び名があります。なので、ここの例のところにもちょっと書いていますが、例えば「外末」というふうにト書に書かれてたら、これは脇役の男という。「老旦」だったら老け役の女と、こんな感じで呼ばれたりします。一番大事なのは、もちろん主役の「正」。これが男役だったら「正末」、女役だったら「正旦」と、こんなふうになります。で、「正末」もしくは「正旦」と呼ばれる主役だけが歌唱を担当します。1人だけが歌うっていう。それから「浄」という男の悪役もしくは道化役、これが非常に面白い役柄で。それから、これ、ちょっと難しい字ですけども、「搥^{ちやたん}旦」と読みますが、女の今度は悪役、道化役という、そういった役柄もあります。そんな感じで、お芝居を舞台でやっていると。最後に書いていますが、一人独唱というのは、主役を担当する人が1人で通して歌うこと。それに、途中でいろんな人がせりふを交えたりするという感じです。それで物語を進めていく。

で、象徴劇というふうに使われます。大道具とか幕、さっき言った、下りてきたりとかする、そういう幕はありません。小道具だけあります。これ、ちょっと次、スライドのほうに写真出しますが。ただし、衣装だけは非常に細かく決まっていたというのも、これはちゃんと脚本に残ってます。

これ、明の時代の、僕らが翻訳してる『元曲選』と呼ばれる作品の本の写真なんですけれども。最初にタイトルがあって、冒頭、ここに楔子というのがあります。これはいきなり補助幕から入ってるんですが、ここに「^{ちゅうまつ}冲末」という

2文字。「冲末」とあります。この「末」っていうのは、だから男役をしてる人です。「冲」っていうのは、突然出てくるっていうことで、大体最初に出てくることが多い、そういう役柄です。「が扮する」です。これ「番王」っていうのは、辺境の王様ということです。異民族の王様に扮して。そして、この「部落」っていうのは、ここでは辺境の部族の部下です。部族の部下たちを引き連れて登場と。そして詩を言う。詩を言って、それからせりふという感じで、さっきの詩もこんな感じで使われています。

大体、登場人物が脇からとか後ろから出てくるんですが、舞台上がってくると、まず一首、詩を詠むんです。これは、だから、さっき言った新喜劇なんです。「ごめんやして、遅れやして、ごめんやしや」みたいな、出てきたら、こうやって何か一つ自分の持ちギャグを言いますよね。あれって、やっぱりその人の存在とか、こういうキャラが出てきたんだとか、そういうのが分かるんですけども、中国の元の時代のお芝居では、普通まず出てきたら詩を詠むと。退場していく時も一緒なんです。新喜劇でも最後、退場する時、何かギャグを言ってから退場しますが、でも、一緒です。最後に詩を詠んで退場すると。そういった部分があって、ほんとに新喜劇を彷彿させる感じなんです。

で、こんな感じでト書があって、せりふがずっと続いてると。実際の歌の部分なんかは、ちょっと太字になって大きく書かれてる。こういったところ、これは歌ってる部分です。だから、ここに「唱」っていうのがありますけど、歌うと。これまで、せりふでやりとりしてて、あるところで、おもむろにメロディーが流れて歌いだすと。こういった感じで、オペラ、これが繰り返されるということになります。この辺り、ちょっと内容は置いておきますが。

ちょっとあともう1つだけ。これ、例えば、

いろいろ考え込むっていう意味なんですけれども、「科」っていうのは、そういうしぐさです。だから、このト書は、ここで考え込むしぐさをして、そして、せりふとか。こんな感じでト書があったり、動作があって、しぐさがあって、せりふと歌という形で構成されていますよ。この辺になってくると、歌が連続して歌われたりという感じです。ここ「第四折」っていうのは、これ第4幕です。で、最後にこんな感じでタイトルが書いてあって、おしまいと。こんな感じの、これ明の時代に整理された脚本です。こういったのを一生懸命、読んでるところではあります。

で、元雑劇が最高に流行したのはもちろん元の時代なんですけれども、当時の脚本っていうのは、こういうのが30種類ぐらいしか残ってないんです。明の時代にはもう、たくさん残ってます。なので、その整理された明の時代のやつを僕たちは読んでるんですが、もともと元の時代のはこういう感じで、刊本とか。こっちは写本です。手書きのものです。これは同じお芝居なんですけれども、こういった感じで明の時代の写本とかも伝わってますよということです。

これは、ここが最後、タイトルで、おしまいということになってるんですが。さっきチラッと言った、この後、ここ「諸葛亮博望焼屯」って。諸葛亮って『三国志』の諸葛孔明ですけども。あの人のお手柄をお芝居にしたものなんです。この最後に、ちょっと小さい字ですけど、ごめんなさい、これです。穿さくの「穿」で「うがつ」にせんかん関所の「関」。「穿関」というのが書いてある。これが役者さんの衣装を指示してる部分です。例えば「劉末」っていうのは劉備のことです。「関末」って関羽のことですけども、この辺。劉末はこんな格好、関末はこんな格好とか、全部、これは細かく規定されてるという

のが、もう当時から分かるようになってます。

あとは、ちょっと宋の時代にもお芝居はあったんですが、そのころのお芝居の絵であったりとか。それから、これは元の時代のレリーフ、壁に彫られたものです。お芝居の時の様子とか。それから、これは元の時代の元雑劇の一座が壁に描かれてる、そういう壁画が残ってたりとか。こんな感じです。これ、よく見れば、もう一目瞭然ですが、いろんな衣装を着て、多分、隈取りくまどりなんかもしてたりとかするわけです。こんな感じで大流行していたというのがちょっとでも伝わるかなと思います。

元の時代の舞台は左側のほうですけども、舞台っていうと、こんな感じであってというのが一つ。これ、大体ちょっと郊外にはこういう感じの舞台が建ってます。都市部になると、これは一つの大きな建物の中に舞台があって、そういうところで上演されています。なので、じゃあ都市部とか、こういった郊外で上演されてるお芝居って、やっぱり内容もちょっと違ったりするんですが、その辺は置いておきます。右側のほうが、これは見てのとおり室内ですけども、こうやってお屋敷の中です。この2人が多分偉い人で、この2人が役者さんで、これは楽器を演奏してたりします。これはその他の客。ここのすだれの向こうにいるのは女性たちです。こんな感じで、非常にお金持ちの人とか偉い人は、例えば、これ誕生日の席なんかには役者を呼んで、自分の家でお芝居をさせたりするっていう、こんな感じで鑑賞をしていました。これはレジュメの表紙に載せた写真ですけど、こんな感じで舞台を鑑賞してるということですね。

じゃあ元雑劇っていうお芝居で、どういった内容の。これ、僕、何分までしゃべっていいんでしたっけ。あと4分。すいません。作品ジャンル、どんな内容があるかっていうと。男女の

関係するお芝居や、それから裁判もの、こういったものが非常に数多く残ってます。これはちょっと面白いんですけども、ほんと日本でいう『水戸黄門』みたいなお話がいっぱい残ってます。それから道教とか仏教とか、あるいは民間信仰とか、そういったものを題材にしたものであったりとか。それから歴史上の物語です。こういったものも芝居になってます。それから市井の人々を題材にしたものとか。こんな感じで、とにかく中国で有名なお話は、もうほとんど元の時代にはお芝居になってるということです。

もう時間がそろそろってということで、すいません、作品の世界観ってところを少しだけ、最後、お話ししたいと思います。これ『瀟湘雨』^{しょうしょうう} 雑劇^{ざっく}ってというのは、この後、林先生が詳しくお話しされると思いますんで、もうほんの少しだけ。ちょっとレジュメのほうを見ていただきたいんですけども。ちょっとあらすじに関してはもう端折ります。5 ページです。5 ページのこれ、翠鸞^{すいらん}と護送役人^{ごそうやくにん}っていう2人がやりとりしてるんですが、翠鸞^{すいらん}ってというのはヒロインです。でも、濡れ衣で罪を着せられて、島流しに遭ってるんです。その島流しに連れていく役人と2人で行ってます。

ちょうど護送役人、真ん中ら辺に「早く行け。雨がますますひどくなってきたぞ」と、こういうせりふがあります。すると翠鸞、ヒロインがこれを歌うわけです。「もう大変だ」と、「土砂降りに降られて、そして『早く行け、早く行け』と、島流しに連れていかれる」と。滑って転んじゃうんです。当然、地面もぬかるんですから。すると護送役人、「何を転んでいやがるんだ」と怒るわけです。ヒロイン、「お兄さん、ここで滑ったのよ」と。護送役人が「千人通ろうが万人通ろうが、誰も転んじゃいねえのに、何でお前だけ転ぶんだ」、「よし、じゃあ俺が通って

やる」と。「滑れば話はそれまでだが、もし滑らなかったら、お前の足をたたき折るぞ」と言っ
て、歩いて、滑って転ぶという。こういったのも全部、前振りがあって、そして自分で落としてるっていう。明石家さんまとかがよくやりますけど。みんな他の芸人さんや役者さんが「おいしい、おいしい」とか言って食べてたら、「いや、絶対、おいしいないやろ。ほんまか、ほんまか」とか言いながら、最後に自分が食べて「おいしいやん」とかいう、あんな感じが、もうほんとそのまま。これ、読んでて笑っちゃうって
いう、そういう感じのお笑いが入ってたりします。なので、ほんとに笑いの要素ってというのは、一つ、非常に大きな部分があたりします。

その他に『東堂老』のお話もしようと思ってたんですけども、ちょっともう飛ばそうかな。すいません。じゃあ、ちょっと時間がもう、あと少しだけいいですか。ごめんなさい。11 ページに。少しだけ、最後にご紹介したいと思います。

11 ページに蘇秦という、これは歴史上の人物ですが、この人を主人公にした物語があります。これは蘇秦が一念発起して勉強をして、役人になるんだというふうに旅立つところから始まるんですけども、実は蘇秦はなかなか、途中で病にかかってしまっ
て、それもできなかったと。ちょっとプリントのほうで見ていきましょうかね。11 ページ、一番下のほうに、出仕の途上で病を得ると。「試験を受けて頑張るぞ。官僚になるぞ」と言って出かけたんだけど、病になってしまうと。

次、12 ページです。蘇秦、やむを得ず実家にいったん帰るわけです。もちろん出かける時には「おやじ、見ておれよ」って、「すごい役人になって帰ってくるからな」と言って、たんかを切って出ていくわけですけども、実際には病を得ただけで帰ってきてしまうと。蘇秦が

帰ってきたところで、「どうして誰も何も言わないんだ」と。家族は目の前にいるのに、何も言ってくれない。すると蘇大公、これはお父さんですけど、「お前じゃ、お前。何で役人になっておらのじゃ」と、非常に冷たく当たる。その後、蘇秦の妻のせりふですが、「あなたが役人になってたら、誰も避けたりしないわ」とか、奥さんまでもこんな感じです。この蘇大公っていうお父さんがもう、結構面白い役柄で、下から10行目ぐらいに、「お前はあの時、随分大きなことを言って出かけたはずじゃないか」と、「何をしに家へ帰ってきたんだ」とか、こんな感じで突き放してる。というのは、ひとえに蘇秦が国家公務員になって帰ってきたら、これはもう一族繁栄が約束されるわけです。お金持ちになれる。それを非常に期待して送り出したわけです。なのに、何もしないで帰ってきたから、もう非常に怒ってるんです。で、最後、下から2行目のところ、もう追い出しちゃうんですね、「出ていけ、出ていけ」と。

で、13ページのほうです。今度は蘇秦が出ていった後です。出ていった後、13ページなんですけども、10行目ぐらいにお父さんのせりふ、「おお、蘇梨や、お前、秦を見なかったか」と。蘇梨っていうのは蘇秦のお兄さんなんです。だから兄弟ですけども、お父さんはお兄さんのほうに向かって、「おい、お前、蘇秦、見いへんかったか」と。もう蘇秦、出ていっちゃいましたから、追い出されて。そうすると、「ああ、出ていきましたよ」と。すると、お父さん、「何で引き止めなかったんだ」と。これは、お父さんがもちろん追い出してるんです。追い出してるんですけども、「何で引き止めないんだ」と、こんなふう言う。これを今度、順繰りに家族とか、お兄さんの奥さんであったりとか、蘇秦の奥さんであったりとか、果ては自分の妻、蘇秦のお母さんにまで、もうみんな責めていって、

「何でお前が止めへんねん。何でお前が止めへんねん」とか言いながら八つ当たりしていくっていう。

最後に次のページ、14ページを見ていただくと、一番上にお母さんです。李氏、お母さん、「おい、くそじじい」と、「全部、あんたのせいじゃないか」と、「何、八つ当たりばかりしてんのよ」という感じで。追い出したのはもちろんお父さんなんですけど、こんな感じで、こういうところにやっぱりちょっと慈母、慈しむ母。そういった、ちょっと最後はお母さんが、やっぱり案じてる部分があるというのが分かります。この後、実は一緒に旅立った張儀は、先に大臣になってるんです。その張儀を頼ろうと思って行くんですが、実際には張儀に非常に冷たく当たられてしまうと。まず追い返されるんです。ここ面白いんで、またぜひ読んでください。訳、出ていますんで。これこそ京都で紹介すべき部分なんですけれども、ちょっと時間の都合で省略します。

最後、15ページです。蘇秦が故郷に錦を飾るというところで、最後は発奮して大臣になって、実家に帰ってくるんです。そうすると今度、15ページの段落が変わったところです。お父さん、「わしは蘇大公。家族を連れて迎えに、息子に会いに行くところ」と。「おい、元帥のお父上君と母君、兄、兄嫁、ご夫人が入り口におるぞ」ということで、「蘇秦に会わせろ」と言うわけです。すると、もう蘇秦はもちろん勘当されてますから、「何がお父上君や」って。これ、お父さんは田舎もんですから、わざと偉そうな言葉、自分で言ったつもりなんです。そういう原文なんです。で、都合いいんです。「息子よ。お前は貧に甘んじるようなやつではないと思っておったぞ」とか、こう言って手のひらを返すわけです。

で、最後に16ページ、一番裏側ですけれども。

「お前はわしの息子じゃないか」と、「何で顔を見せに来ないんだ」と、「わしはお前の父親じゃろうに。どんな仕事に、役職に就いたんだ」と。「たいそう立派になりおって」と、「親のわしらも鼻が高いわ。でかしたぞ」と、自分で追い出しておきながら、こんなことを言うわけです。蘇秦のほうはずっと根に持っていましたから、「お前なんか父親じゃない。母親じゃない」と言って、「つまみ出せ」と言って追い出してしまいます。そこで親友の張儀が「実はこうこう、こういうことだったんだ」と言って、内容を、秘密を打ち明けて、蘇秦もやっと怒りを収めるという、それで大団円という形になっていきます。最終的には家族のことも許してあげるんです。

このお芝居の中で、ちょっと最後に一言だけ触れておくと。最後の歌の部分ですね。蘇秦が子として拝礼すると、その後、「えんおうきつ 鴛鴦煞」という歌があります。「あの頃は、さすらい落ちぶれ、憐れみ垂れる人もなし」と、「それが今日、衣冠整い、お近づきをと誰もが先を争うほどに」。偉い人になって帰ってきたものだから、みんながお近づきになりたいと思って寄ってくると。「諸侯を震わすこの威名。腰に掛けるは」、これ6つの国の大臣になったんです。「さりとても、胸の内にて密かに思う」。そうはいっても、心の中で思うのは、「移ろいやすきは人の情」と。「もしいつか、馬を失い金まで尽きて、無一物にでもなったなら」。全部、失敗したり、あるいは何かが、戦に負けたりとかで、それで自分が一文なしとかになってしまったならば、「この蘇秦、かつてのように赤の他人として扱われるだろう」と、「きっと人から冷やかされるだろう」と、こういうふうに歌って締めてるんです。これが一番最後の締め歌になってる。

これは、だから、やっぱり人間っていうのは、古来ずっと「豊かになりたい。豊かになりたい」。

特に蘇秦の家のお父さんなんかも田舎の農民でしたから、何とか豊かな暮らしがしたいということで、息子を送り出したわけですが、結局、息子が志を得ず帰ってきた。そうすると、頭にきちゃって追い出してしまう。その後、息子が偉い人になって帰ってきたら、今度は手のひらを返して、「やっぱわしの息子だな」と、こうやって言ってる。蘇秦は、だから、そういう家族を目の当たりにして、自分が非常につらい思いになったりしてるわけです。それを最後の最後で歌ってるということで。だから、元の時代っていうのは、今から600年、700年ぐらい前でですけども、そういった時代の人がお金に対して非常に冷めた目線を持ってる。これは、蘇秦自身がほんとにそうだったとか、そういうことではなくて、この脚本を作った人、あるいはそういう認識がある程度広まってる、確かにそうだよって、「結局、お金で動いちゃうよね」とか、そういったのが、こういう「それってどうなの？」っていうところが最後に歌われて、お芝居が締めくくられてる。なので、父の滑稽さとか。あるいは滑稽なんだけれども、それは「お金持ちになりたい。豊かになりたい」って純粋な、あるいは純朴といいますかね、そういったストレートな部分と、蘇秦のように非常に冷めた人ということで、お芝居の中にやっぱりその当時の価値観とか考え方っていうのが垣間見えてるというのが、ここから分かるかと思います。ほんとはその前に1個、飛ばしちゃいましたが、『東堂老』っていうお話なんかは、もう家族の気持ちのつながりっていう部分を書いてる。

最後に、ちょっと僕が今回いろいろ、お話を頂いて考えたことを取りとめもなくつづただけなんです。そもそも臨床物語学っていう言葉自体になじみがなくて、一体どういうことを学問するんだろうというふうに、今日の朝も

思っていて、実は今もそうなんです。僕たちがやってきてるのは、中国の古い時代の文学を鑑賞してる、分析してる。じゃあ、何でその古典文学をやってるかっていうことで改めて考えてみると、いつかの時代、どこかの場所で流行ったものっていうのは、必ず廃れるわけです。永遠に流行が続くということはありません。これは歌舞伎なんかもそうです。当時はもちろん大流行していたわけですが、今では古典芸能になっている。ただ、それが一部の人の共感を得続けることによって、ずっと時代が変わっても鑑賞され続ける。あるいは共感を得続ける。「ああ、そうだよな」って思える。これがクラシック、いわゆる古典として存続し続けるゆえにあるというふうに考えています。

つまり、今に伝わるクラシックって、例えばどういうものがあるかっていうと、先ほど見たお笑いであったりとか、家族の人情であったりとか、お金に対する考え方であったりとか、いろんなものが。もうそれこそ喜怒哀楽とか酒色財気とか。酒色財気っていうのは、林先生に教えていただいた言葉なんです。「酒」「色」「金」で、最後に「気」っていうのが、これ「怒り」なんです。この4つを断ち切ることができれば、人間は悟れるというようなお話を頂いて。お酒は確かに飲まない人もいますよね。色に関しても別に我慢できますかね。お金に関しても、僕はもうほんと無頓着ですから、全然どうでもいい。怒りは難しいんです。コントロールするのがほんとに難しい。セネカでしたっけ、古代ギリシャの時代から怒りとは何かっていうのが問われてますから。いまだに僕もずっと分からない。やっぱり怒っちゃう。林先生も怒っちゃうそうですけれども。なので、そういったどうしようもない抗いがたい感情っていうのは、やっぱりある。

で、今、そういった古典の物語、これを学問

していくという。つまり、物語が説いていること、その中で説かれてること、これを現代社会に当てはめてみて、それを臨床的に考えるっていうことなのかなと思ったりしてるんです。古典の作品に触れて、その当時の人々と同じ感覚、共感を得られるもの、そういったものを、今悩んでる人たちにも同じように還元していく、そうすると、それを解決していく何か役に立つのかなというふうに思ってます。中国はもう、ご存じのように、歴史は古くて、土地は広くて、人は多いですから、たくさんの物語があります。お隣ですから、今の日本人、現代の日本人が見ても面白く、共感を覚える。環境が似てると、大体同じような話が生まれてきます。人間って、あんまり考えることって変わらないなっていうのが実感で、実際、中国にこんな変な話あるよっていうのが、実はブラジルで同じような昔話があったりとか、そんなことが確認されてる。それは学問としては類話って呼ばれるんですけども、こういったやつです。類話としてまとめたり、調べたりとかいうことがされています。

なので、臨床物語学の研究っていうのには、古典の世界に足を踏み入れて、その中でいろんな人たちが、いろんな時代の、いろんな場所の人たちが同じようなことを言ってる、扱ってる、そういった類話の分析が一つにはあるのかなと。つまり、グローバルにあちこちの世界中の物語と同じような物語がある。そうすると、「それって人間のほんとと真実の部分なんじゃないの？」っていうふうに考えられる。それは、やっぱり現代社会に生きる人にも役立てることができていくんじゃないかなとか、そんなことをちょっと考えています。その意味では、中国にはやっぱり古典の物語って、めちゃくちゃ多いですから、そこを研究する意義はあるのかなということ。

物語には、いつか、どこかで共感する人が必

ずいると。もちろんそれまでに共感を得ないものは、どんどん淘汰^{とうた}されてます。伝わってきていない。ですから、そうやって残ってきた物語には、時間も空間も超越して人々の心に響く何かがあると。「じゃあ、その何かに対して、物語の中の人々は、作中の人物はどう関わっていったのか。その関わり方を分析すれば、今の人にもヒントになるんじゃないのかな」というのが臨床物語学なのかなというふうに、ちょっと考えたりしていますということです。

すいません、まだ他にいっぱい話したいことがあったんですけども、ちょっと時間が来ましたので、ここまでにしておきます。ありがとうございました。

林：後藤先生、ありがとうございます。白熱のご講義というか、ご講演でした。皆さん、もったいないですね。他にももっと、本学の教職員とか学生が聞いていたらいいのと思うテーマがたくさんありました。

休憩なんですけども、すいません、5分に短縮させてください。

<休憩>

林：もしかしたら、まだお戻りでない方もいらっしゃるかもしれませんが、そろそろ後半、パネルディスカッションの話題提供ということで、西川芳樹先生のほうから、まず「兄弟の絆」というテーマでお話しいただきたいと思います。では西川先生、よろしくお願いします。

パネルディスカッション

話題提供①「兄弟の絆 ～「虎頭牌」劇に見える女真族の世界～」

西川芳樹（関西大学 非常勤講師）

西川：お願いします。関西大学非常勤講師の西川です。もう早速、巻きでやれということなので。今回は「兄弟の絆～『虎頭牌』劇に見える女真族の世界～」ということで、元雑劇の中でも女真族という民族を題材にしたお話、お芝居を紹介していきたいと思います。

早速、あらすじから見ていきましょう。「第一折」って書いてます。この「折」というのが幕に相当するものです。そのあらすじですが、金牌上千戸の山寿馬のもとに叔父の銀住馬夫妻が訪ねてきます。山寿馬は両親を早くに亡くしてしまっていて、銀住馬夫妻が育ての親でありました。3人が再会してるところに朝廷より使者がやって来まして、勅命により山寿馬を天下兵馬大元帥にすると、ついては金牌上千戸の地位を信頼のおける人物に譲るようにと伝えます。この話を聞いていた銀住馬は、自分に金牌上千戸を譲るように求めます。金牌というのは、こんな感じのお札みたいなやつなんです。実際は、これ縦20センチぐらいのものなんですけれども。写真は金じゃなくて、銀の牌なんですけれども、こういうものを身に着けまして、これが身分の証になっていたんです。これを叔父さんに譲るというふうなことになるわけです。ところが、銀住馬という人は非常に酒癖が悪いんです。なので、山寿馬は叔父の銀住馬に金牌上千戸の地位を譲るのをためらうんですけれども、銀住馬が禁酒の誓いを立てて、「もう絶対、酒を飲まないから」と約束するので、育ての恩もありまして、この地位を譲ることを認めます。

次に第二折、第2幕です。任地に赴く銀住馬を見送るために、兄の金住馬が訪ねてきます。

金住馬も銀住馬の酒癖を心配して戒めますが、銀住馬は、第2幕だけは天下兵馬じゃなくて天下大元帥になってるんですけども、「天下大元帥の叔父だから、失敗しても誰も文句を言えないから大丈夫だ」というふうに言うんです。金住馬はこれをたしなめまして、貧しいながらも精いっぱいもてなして、銀住馬を見送ります。

次、第3幕です。任地に到着した銀住馬が、早速誓いを破ってお酒を飲んでいて、^{とりで}秦が敵に攻め落とされたという急報が入ります。慌てた銀住馬は軍隊を引き連れて寨を取り戻すんですけども、お酒を飲んで軍務を怠ったということで罪を問われまして、裁かれることになります。しかし、銀住馬は、元帥の叔父であるということを盾に取りまして、逮捕に来た元帥府の役人たちを何度も追い返します。ですが、最後に屈強な兵隊がやって来て逮捕されるんです。で、裁判になるんですけども、銀住馬は不遜な態度を改めることはありません。そこで元帥である甥の山寿馬が、法律にのっとって死刑判決を下すんです。そうすると銀住馬は、山寿馬の妻や部下に泣きついて、何とか命を助けてくれと助命嘆願をさせます。その結果、死刑から百たきに減刑されるんですけども、銀住馬は、それでもまだ不服だと、たたかれたら死んでしまうということで、今度は家宰に減刑願いをさせます。この家宰というのは、甥の山寿馬の家に長年仕えていた召使いなんです。この人に何とか泣き落としをさせて、減刑してくれというふうに依頼するんです。そうすると、「じゃあ代わりに家宰が打たれるんだったら、百たきの刑を受けるんだったら許してやる」ということで、何の罪もない家宰に自分の身代わりとして60回、棒刑を加えるんです。このおかげで何とか減刑されまして、銀住馬は残りの40回だけ打たれることで罪を許されます。

これ、裁判を受けてる銀住馬です。中央でひ

ざまずいているのが銀住馬です。机に座っているのが山寿馬です。甥っ子です。その右側で帳面を見てるのが罪を読み上げている役人で、左側に棒を持って立っている人たちが、これが百たきの刑を加える役人です。で、門の陰から銀住馬の奥さんがこっそり中の様子をうかがっていると。こんな情景です。

次、第四折です。最終幕です。山寿馬は、妻や役人たちを伴い、銀住馬の見舞いに行きます。しかし、銀住馬は、年老いた親類に刑を加えたということをお大変恨んでおりまして、屋敷の門を閉ざして面会を拒絶します。周囲の人たちがなだめると、銀住馬はやっと門を開いて出迎えますが、それでもまだ刑を加えた甥っ子の山寿馬をひどくなじるんです。そこで山寿馬が、皇帝の勅命が記された虎頭牌を示しまして、「刑は国の法律で定められていることだから、私はそれにのっとって処罰したんだ」と言うと、銀住馬はようやく納得する。全体で、こういうお話です。

これ、第四折の挿絵ですけども。この奥で座っている、ひげを生やしている人が銀住馬です。叔父さんです。門の外にいてる2人が、甥の山寿馬夫妻と。そして画面の右下のほうで、右側に拡大写真を出していますけれども、プラカードみたいなものを持っている役人がいると思います。このプラカードみたいなやつが、虎頭牌と呼ばれる皇帝の命令を書いた札なんです。ここに法律で裁かれることが決められていたんです。

全体のお話を見ると、こんな感じです。自分勝手にわがままな銀住馬と、それに振り回される周囲の人々や家族のお話ですが、ここで、お芝居の鑑賞の中心になってる歌を見ていきたいと思います。元雑劇は、先ほど後藤先生からもお話があったように、お芝居なんですけれども、歌劇で、途中で登場人物が自分の心情を歌に詠

むんです。この歌の部分が鑑賞の中心になっていたと言われています。この作品の中でも特に特徴が表れている第二折の曲、曲っているのは歌のことですが、これについて見ていきたいと思っています。

第二折の曲なんですけれども、大きく2つの内容が描かれておりまして、1つは女真族の世界です。女真族ってというのは、『広辞苑』によりますと、中国東北部から沿海地方方面に居住したツングース系の民族です。そして、少し飛ばしますけれども、1115年に完顔部の首長、アグダという人が金を建国しまして、この作品の舞台は金が建国されてしばらく経ったところだと推定されます。じゃあ実際に女真族の世界がどのように歌われているのか、見ていきましょう。

「大拝門」というのが曲のタイトルです。これはメロディーのタイトルでして、「大拝門」というメロディーに乗せて歌詞が歌われていきます。読んでいきます。「思いもよらぬ今日この日、常に思うはかつての日。どこに行こうと親族たちが取り巻いて、わしもかつては管弦鳴らし、尽きぬ楽しみ謳歌したもの。まさにこれ、サートゥン^{サートゥン}を、拝門する様な大宴会」と、こういう歌なんですけれども。この中でサートゥンというのは、親戚の後ろに括弧して付いてると思いますけれども、サートゥンというのは中国の北方民族の言葉を、そのまま音を写したものというふうに言われています。この少数民族、女真族を描いた作品、他にも何作かあるんですけれども、それら作品の中では、こういうふうな北方民族の言葉が時折、織り交ぜられているんです。それによって、北方民族出身だという登場人物のキャラクターを表していると思われます。

次の曲、「酔娘子」です。「真珠の粒は豌豆のようにまん丸く、吟味したうえ糸通し、頭巾に縫えば、花の形が現れる。玉帯は金の飾り付け」。

ここで、真珠の粒が糸に通されて、それによって模様を描くということが記されていますけれども、これも女真族のお芝居の中で必ずと言っていいほどよく出てくるものなんです。女真族のファッションを歌に詠んだものです。

もう一つ。「銀盤のような丸顔に、くまなくおしろい塗りたくり、炭田のような黒ひげを、獣毛で編む紐^{ひも}で結う。役人たちはみずから酒令の籌^{ちゅうちよ}筋を渡し、開宴を、告げる杯巡りゆく」と書いていますけれども。ひげを獣の毛で編んだひもで結ったりなども女真族の風俗と思われるます。

最後、「不拝門」です。「ぴいひやり刺古^{ラーゲー}の音は喧^{やかま}しく、どどんどん、鱗皮太鼓は春雷か。宴にて、ああ宴にて、このわしがひとつくると舞えば、皆はこぞってほめそやす」です。ラーゲーというのは笛の名前なんですけれども、これも中国の北方民族の間で使われていた笛なんです。あと、舞を舞うというふうに書いていますけれども、これも女真族を描いたお芝居では典型でして、『金安寿』という作品なんかでは、それこそ何人も女性が舞台上に登場して、みんなで踊るというふうな場面があったりもします。

こういうふうな、女真族の風俗を描いた曲がたくさん歌われています。古典文学というものは、今よりも古い時代に書かれていますから、こういう今の時代には存在しない世界であつたりとか、文化であつたりとか、ものの考え方なんかを知ることができる。これが一つの古典文学の魅力ではないかなと思います。しかし一方で、女真族はそういう民族だったんだと、「ああ、こういう生活してたんだな」というのは何となくうかがえますけれども、現代のわれわれからしたら、はるか時空を超えた他の国の何百年も前の世界ですから、ちょっと縁遠い感じもします。

しかし、それだけではないんです。この第二折の、もう1つ、よく描かれている兄弟の絆、兄弟愛について紹介したいと思います。「心乱れて、後悔絶えず。いかんせんわしに手持ちなく、やむを得ず人に頼みこみ、銭数文を無心する。ようやく買えたどぶろく一瓶、弟に送る餞別に。着任の、期限も迫り、引き留めるのは難しからう。このたび任地へ赴けば、水入らずでの再会は、果たしていつになることか」。これは、銀住馬が任地に赴く際に、お別れのあいさつにきた金住馬が歌っている歌なんです。弟との別れを惜しんで、そしてお金がないんだけれども、一生懸命、借金してお酒を買ってきて、弟を見送ろうというふうになっているのが見て取れると思います。

その次、「落梅風」です。「酒瓶の口をきれいに拭いて、杯に酒をなみなみと注ぐ」と。ちょっと間にせりふが挟まりまして、「青天仰ぎ、太陽に酒を捧げよう。わしのような貧乏人、ほかには何も望みはしない。願うはわしら兄弟の、再会の日の近いこと」と。やはり弟を見送る酒宴の様子ですが、酒瓶の口をきれいに拭いたりする、こういう細やかなところに、金住馬の弟に対する気遣いというのが出ていると思います。

もう時間が押してきたので、ちょっと飛ばしますけれども、大体、同じような内容です。こんな感じで、古典というのは、今とは違う世界のことも描いてますけれども、現在のわれわれにも通じる人類に普遍の感情というのを伝えるという側面もあると思うんです。

最後に挙げましたのは、明の時代の何良俊という人の『虎頭牌』に対する評価なんですけれども、「『落梅風』などの歌詞は、その心情と言葉に於いて真に迫り、まさに玄人の手によるものである」というふうに書いています。何良俊も、元雑劇よりも何百年か後に生まれた人なの

で、やはり時代を経ても、この金住馬の描写というものが、人間の真の姿に迫るものがあるというふうに考えているようです。

こんな感じで、ちょっと早くなりましたけれども、元雑劇というのは、古い、そして今とは違う世界を伝えつつも、同時に人類に共通する感情も伝えているのではないかなと思います。駆け足になりましたけれども、ご清聴ありがとうございました。

林：西川先生、ありがとうございました。では引き続きまして、ちょっと私のほうから提供させていただきます。

話題提供②「酒と仏と男と女 ～仏教劇『忍字記』『東坡夢』と才子佳人劇『瀟湘雨』『鴛鴦被』の物語～」

林 雅清（京都文教大学こども教育学部 准教授）

林：改めまして、林でございます。お手元、私のレジュメといいますか、小冊子をご覧ください。

ちょっと最初、ひとくさり。「東西東西、ここにお披露目いたしまするは、今を去ること700年、時は中国・元の御世、町の盛り場・芝居小屋にて、人気を博した数々の、世にも楽しい物語。それでは皆さま、お聞きあれ。酒と仏と男と女。へパン、パパパパン、パパパンパン、パララン……」、やめておきましょう。失礼しました。

これ、先ほど後藤先生にご紹介いただきました私たちの『中国古典名劇選』、ちょっと後でも説明しますが、ここのはしがきに、「東西、東西」、東西声というのを書かせていただいております、多分、こういう七五調や八五調が、ちょうど私たちのテンポに心地よいのかなと。この心地よいテンポで、心地よい字数で、この元曲、元雑劇の歌の部分の何とか工夫して皆さ

んにお伝えしようと翻訳を進めているわけなんです。多分ですよ、700年も前のことですし、中国ですし、分かりませんが、見ている観客たちは、歌が始まったら、ちょっと高揚するような、そういう気持ちにもなったんじゃないかなって私は思ってるんです。

で、私が今回、皆さんに提供する物語は、元雑劇の中から4つの作品なんです。何で「酒と仏と男と女」っていうテーマにしてるかという、ちょっとどこかのパクリですけど、私のテーマでもあるんですよね、これ。私は、中国古典文学のお芝居を研究してますけども、一方で、お坊さんでもありまして、仏教も研究しています。そういうところで、このお芝居の中に、仏というかお坊さんとか、男女の関係とか、酒も含めてですけども、どういうふうに描かれているかなということ。

まず、^{ていていぎよく}鄭廷玉という人が作ったと言われていた布袋さんのお話。といっても、布袋さんが主役じゃないんですけど、『^{にんじき}忍字記』という物語があります。ちょっといろいろ見にくいところもあるかもしれませんが、物語の内容は、お手元の資料にちょっと書かせていただいていますので、また後ほど詳しくはご覧いただけたらと思います。

さて、主人公は^{りゅうきんさ}劉均佐という人物なんです。この劉均佐という人物がケチンボ。大金持ちで、いっぱい店を持ってるんですけど、ケチなんです。この人を何とか救おうというふうに天界から遣わされたのが布袋さんなんです。布袋さんが教化しようとするんですけども、なかなかそんなすぐには金とか家とかを手放してっていうことにはならないんです。そういうところに、奥さんの王氏と、仲はよくて一緒に酒を飲んでるんですが、ある時、門前に、^{りゅうきんゆう}劉均佑といって、名前が似てるんですけど、後で似せたんだろうなと思ったりするんですけど、この人が倒れて

いたんです。この人、貧乏人なんです。劉均佐は一応、義侠心があるのでこれを助けて、年下だったんで、弟になれやということで義兄弟になります。で、店の手伝いをしろと手伝わせます。

そうして店をやっているうちに、劉均佐は布袋にいろいろ言われるんですけども、最終的に「仏法を授ける」ということで、手のひらに忍ぶの「忍」の字を書かれるんです。「何なん、これ汚いな」と思いながら、後で布袋が帰ってから洗おうとするんですけど、なんぼ洗っても取れないんです。そしてある時、お乞食さんが家を訪ねてきて、しかも「金くれ」じゃなくて、「俺が貸した金、返せ」みたいなことを言うてくるんです。「何、お前」って言うて突き飛ばしたところ、そのお乞食さんは死んじゃうんです。で、胸に忍の字が現れて。つまり手のひらにあるから、押したのが反対に写るんですけども、それが分かる状態になって、「さあ、どうしよう。困った、人を殺してしまった」っていうことで、布袋がまた現れるんです。「お前が出家するんやったら、助けてやるぞ」と言われて、「しょうがないから出家します」と。そうしたらそのお乞食さんが生き返って、罪から逃れられたので、しょうがないから、とにかく家の離れで出家というか、修行をしていくことになります。

それで、いろいろいきさつがあるんですけど、ちょっとすっ飛ばします。最終的に、^{じょうえ}定慧という布袋さんの弟子がいるんですけども、この人の下で修行をすることになって、仮の弟子みたいになるんです。その時に定慧は、俗世の、先ほどの酒色財氣じゃないけど、それを断ち切らせようっていうことで、お金とか店とか家とか、子どももいるんですけど、奥さんとか子どもとか全部、手放させようとして夢に見せるんです。そうしたら、やっぱり執着心が湧いてきて、最

最終的に出家をやめて家に戻るんです。何で戻るかというと、面白いんですけど、夢の中で師匠の布袋さんが奥さん2人と子どもたち連れて出てきて、グルッと舞台を一周して終わる。それを見た劉均佐が激怒して、「何や、偉そうなことを言いやがって。私には嫁のことを忘れろと言いな、自分は2人も奥さん、おるのか」と。まあそういうふうなことで、実家に帰ったんです。

帰ってみたら、ちょっと世の中の様子が変わってて、自分の家もない。もうしょうがないから自分のとこの墓へ行って墓参りしたら、変なじいさんが来てて墓参りしてるんです、孫とか子とか連れて。「人の墓で何してんねん」と言ったら、墓参りしてるおじいさんが「いや、私は自分のじいさんの墓参りをしてる」と。ようよう話を聞いてみたら、そのお墓に入ってるのは劉均佐だというんです。つまり、しばらく修行をしてた間に何十年も時間が経っていて、この世では。なんか『浦島太郎』みたいですよ。ね。「ああ、もう自分の知ってる人は誰もいない」と。あれ、『浦島太郎』、最後どうなるんですかね。この人、それで出家するんです。世を夢んで、奥さんとか金とか全部、そういうことにかかずらっててもしょうがないなって、そういうふうになっちゃう物語、これが『忍字記』なんです。

ちなみに、これもあんまり時間ないので、サッといきますね。これは『元曲選』の挿絵ですけど、お乞食さんが「金、返せ」って言ってくるのと、あれが布袋さんです。ちょっと小さいんですけど、この布袋さんって、めちゃ太ってるんです。この布袋さんって、実は弥勒さんの化身、弥勒仏の化身というふうに書かれています。もう、はなからネタばれなんですけど、この元雜劇って。最初に阿難っていう物語に関係ない仏弟子が登場するんですけども、その人

が全部説明するんです。「実は劉均佐っていう人も天界の生まれ変わりで、そして布袋さんも弥勒の生まれ変わりで」と。

ちなみに私が2016年に中国へ行った時、布袋とは言わずに、大体、弥勒さんと言います。しかも弥勒菩薩じゃなくて、弥勒仏というふうに祀られています。お寺に入ったらまず祀られてるのが、いわゆる布袋さん、太っちょの。で、右のこっちに、袋を持ってるんです。布袋めいぶくろを持ってるから布袋さんなんですけど、実在の人物です、この人。唐の時代の契此かいしというお坊さんなんです。実は弥勒っていうと、日本人は大体、これ広隆寺の弥勒さんですけど、半跏思惟像をイメージするかと思うんですけど、スマートですよ。それが、これ（太った布袋像）なんです。「え？」と思うんですけど、どこへ行っても、弥勒っていうとこれです。ちなみに近くにある、黄檗山萬福寺の布袋像。これ、似てますよね。当然です。後の時代、明の時代以降に伝わった仏教は、現在の中国のお寺と同じ形式。禪宗様式なんですけども、弥勒さんとして布袋さんの像が黄檗山にはある。これ、さっきジッと見てたら、西川先生の顔に見えてくるなって、ずっと思ってたんです。西川先生は「全然、ちゃうよ」って言んですけど……余談でした。

次、似たような坊さんが出てくる物語で、『東坡夢』とうぽむっていうのが有るんです。これはまたちょっとさっきとは違うんですけども、主役は仏印っていうお坊さんです。蘇東坡そとうば、つまり蘇軾そしやくも出てきます。蘇軾は宋の詩人で政治家でもありますけど、いろいろ政治闘争があって、自分が左遷されるわけです。で、その仕返しをしてやろうということで、旧友の仏印おつんを頼ります。この人は頭がいいし、よくできる。なので、還俗げんぞくして、還俗っていうのはお坊さんを辞めることですが、一緒に戦おうぜっていうふうに言うんですけど、全然なびかないので、仏印を誘

惑しようとしします。そこで、白牡丹^{はくぼたん}っていう花魁^{おいらん}、妓女なんですけども、彼女を使って、いわゆる色欲、色戒を犯させようとするわけです。どちらも詩人・文人なので、いろんな詩のやりとりとかして、あと禅問答をしたりするんですけど、それでもなかなか仏印には勝てない。

で、「せっかく昔の友達が来たんやから酒でもてなせや」って。「ここはお寺だから、精進ですよ」と。「そんなことを言ったら、寺、ぶっ壊すぞ」みたいなことになって、そういう話をして、お酒はまあいいだろうと。仏印さんも、せっかく昔の友達が来たから酒は飲んでもいいやと思ってるんです。仏印さんもお酒は飲むんです。でも、肉はやめておきますと。「なまぐさは食べないよ」っていうふうに言うんですけども。そして白牡丹にお酌されながら、楽しく宴会みたいなことになるんですけども、結局、仏印は白牡丹の誘惑には一切動じない。そういう状態になったので、さあ仏印としてはどうしたいかということ、蘇東坡をちょっと改心させたいわけです。「そんな政治闘争をやっても、しょうがないで」ということで。ただ、直接的には言わないんですね。誘惑されてるのも知ってるので、どうするかというと、弟子の「行者」、これは「行者」って書いてますが「あんじゃ」と読みます。禅宗のお寺で、弟子ですけども、ちゃんとした出家はしてない小僧さんみたいなものと思ってください。身の周りの世話をする人なんですけども、この行者に「お前、わしの代わりに、ちょっとわしの寝所に行って待っとけや」と、「連れてくるから抱いたれよ」ということになり、実際、抱くんです。そういう描写も出てきます。

仏印は仏印でちょっと法力を使って、花の精がお寺にいっぱいいるんですけども、その花の精4人に、夢の中で蘇東坡を誘惑せよと言います。で、蘇東坡はその夢を見るんですけど、結

局、松の神さんっていうのが出てきて、その神さんに花の精たちが連れられていくから、「ああ、世の中は無常だな」っていうふうになっちゃうと思うんです。結局、仏印には勝てない。白牡丹も勝てないし、夢の中に出てきた花の精たちも、また実際に登場して仏印にいろいろ禅問答を挑むんですけど、全部勝てない。ということで、「ああ、素晴らしい。真のお坊さんだ」っていうことで、蘇東坡は感化されて仏印の弟子になる、そういう物語です。

蘇東坡というのは実在の人物なんですけども、この絵は仏印さん、偉いお坊さんで、こちらが蘇東坡です。あっちは蘇東坡が夢の中で4人の美女、花の精に囲まれてるところです。これは蘇東坡像を日本人が描いたものですけど、こういう肖像画があったりします。

続いて、今度は男と女のバージョンにいきましょう。今の『東坡夢』に関しては、若干、男と女的なところも出てきますが、絶対になびかないっていう話でした。続いて『瀟湘雨』。これは先ほど後藤先生のお話にもありましたけども、翠鸞^{すいらん}という女性が主人公です。この人は張^{ちやう}天覚^{てんかく}という役人の娘です。張天覚は清廉潔白な役人なんですけど、^{ざんげん}讒言に遭って流罪になるわけです。その時に、船が転覆して父娘は離れ離れになり、翠鸞は崔文遠^{さいぶんえん}という人に助けられます。漁師さんなんですけども、崔文遠の義理の娘みたいになって育てられるんです。

その時に崔文遠の甥^{さいでんし}子の崔甸士^{さいでんし}っていうやつが現れ、こいつがどうしようもないやつで、どうしようもないんですが優秀なんです。科挙の試験、国家試験を受けに行く途中で、崔文遠の所にあいさつに来たら、「お、べっぴんさん、おるやん」っていうことで、結婚したいなあって翠鸞に一目ぼれしちゃって、結婚することになりました、崔文遠の取り持ちで。翠鸞も、実のお父さんがどこにいるか分からないし、どうし

ようって思ってるんですけど、まんざらでもない感じなんです。で、結婚しました。結婚したんですよ。結婚してその翌日に、ちゃんと科挙の試験を受けに行って、「官職を得たら、君を迎えに来るから」って言って、行ったきり。都で、試験監督の役人に「お、君は優秀だけど、嫁さんはおるんか」と言われ、「いや、いません」って言うんです。「あ、ほんなら、うちの娘どうや？」って試験監督の趙銭ちようせんという役人に言われて、「分かりました」って言う。「ほんなら、もう官職をやるわ」って言われて、地方の官職をもらって赴任して、その娘と夫婦になっちゃうんです。

3年経ちました。翠鸞、待ってるんです、迎えに来てくれるのを。で、噂に聞くんです、崔甸士がどこかの町の県令さんになってるよって。そこに訪ねていきました。訪ねていったら、なんか嫁さんおるんです。しかも崔甸士は、現れたら「おお」ってならないんです。「お前は」って怒られるんです。「わしの家の金品財宝を盗んで逃げやがった下女だ」というふうに言って、翠鸞は流罪になります。先ほど護送役人の話が出てきましたが、ああいうシーンになっちゃう。

そこまでされて、翠鸞、最終的に張天覚が復権して、事のいきさつを知って、崔甸士と趙銭の娘を捕えてこいっていうふうになるんですけど、もう翠鸞は怒り心頭で、「私が自分で捕えてくる」って、兵士を引き連れて捕えに行くんです。で、行って捕えてきて、さあ殺すぞっていうふうになるんですけど、その時に崔文遠、育ての親が出てきて、「私の顔に免じて許してやってえな」っていうふうに言うんです。そして瞬間的に変わって、「分かりました。じゃあ」っていうことで崔甸士を許すんです。でも趙銭の娘には「その代わり、こいつは許さん」となる。崔甸士に怒ったらしいのと思うんですけど、「趙銭の娘は許せへんから、こいつは

私の下女にしてくれ」と、そう言います。でも趙銭の娘も黙ってないんです。これ、道化役の女性が役をやるんですけど、「いいわよ。下女になってやってもいいけど、妾めかけにもしてね。独り占めは許さないから」って言うんです。ドタバタなんですけど、そんなお話。結局それで大団円となっちゃうんですけど。もう時間がありませんね。

最後、『鴛鴦被』えんおうひ。これも男女の劇なんですけども、こっちは玉英ぎよくえいという女性が主人公。似たような設定です。李府尹りふいんというお役人さまの娘です。これは清廉潔白なお役人。これも讒言によって都に召喚されるんです。殺されるかもしれないってところになります。ただ、清廉潔白過ぎて、金がないんです。都まで行く路銀がないんです。路銀を借りようと劉道姑りゅうどうこという人に相談に行ったら、「ああ、お金持ちの知り合い、いるよ」って、劉員外りゅういんがいっていう人を紹介されます。劉員外は金を貸すんです。貸すんですけど、その時に何で貸したかという、李府尹にべっぴんさんの娘がおるということを知って貸すんです。で、劉道姑に「協力者になれよ」というふうに脅して、劉道姑が保証人っていうか、証人みたいになって、そして保証人のはんこを玉英も押させられるんです。そして李府尹は都へ行きました。

1年経ちました。10両を貸すんです。10両を貸して、1年で20両になるんですね。どんな暴利をむさぼってんねんと思うんですけど、それを返せというふうに玉英に言うんです、今すぐに。李府尹がおれへんからね。返せって言われても、玉英には返す金なんかないので、じゃあ劉員外はどうするかっていうと、劉道姑に取り持ちを、媒酌を頼むんですけど、取り持ってもらって結婚するんです。劉員外は勝手に結婚した気になってるんですけど、玉英は洪々という感じで、タイトルになってる鴛鴦被おしどり、鴛鴦の

布団なんですけども、その掛け布団を結婚の証拠として送ります。布団を送るっていうことは、いわば寝所を共にするっていうことなんで、「それを証拠に渡しますわ」って、取り持ちの劉道姑に渡す。それで劉道姑、この人は道教の寺院の尼さんなんですけども、自分ところの寺で密会をさせようとするんです。

なんですが、その当日の場に劉員外が来れなくなっちゃうんです、運悪く。役人に盗人と間違われて捕まって、吊るし上げに遭うんです。その時に、たまたま通りがかった張瑞卿ちょうずいけいという書生さんが尼寺に泊まることになるんですけども、そこへ後から女性が来るわけです。そこで、「怪しいぞ。密会するんちゃうか……よし」と思って、自分がその密会相手の男性のふりをして、玉英と結ばれるんです。つまり玉英はだまされたことになるんですけど、見ず知らずの書生さんに抱かれて。それが金を借りた相手と思ってたら、違うかったみたいなの。で、違うのはいいんですけども、こいつ書生さんなんで、また科学の試験を受けに行くんです。どこかで聞いた話ですよ。張瑞卿は「官職を得たら、迎えに来るよ」と言っただけで都に試験を受けに行きます。「また、こいつもか」と思うんですけども、違うんです。この人は、ほんまに迎えに来るんです。

ただし、その前にもう劉員外が怒ってますから、玉英をあらためて自分のものに、手込めにしようします。でも、玉英はなびかない。そこで、自分とこの酒場で働かせます。そこに戻ってきた張瑞卿が、身分を隠して見に来ます。「おお、玉英を見つけたぞ。何か大変なことになってるな」と。どうしようと。で、一応、昔に家を出た玉英の兄という体で、劉員外に「妹との結婚を認めてやるから、いついつ結納を持ってこい」みたいな話をするんです。その時に玉英の父の李府尹も復権して、戻って来て娘の状況

を知り、「ああ、こいつら罰する」と。特にこっちの劉員外が罰せられるんです。で、玉英と張瑞卿が結婚をして、ハッピーエンド。劉員外にしたら、たまったもんじゃないです。下心はあるにしても、貸した金も返ってこうへんわ、自分は処罰されるわで、何も悪いことはしてないんですよ。ちゃんとというか、手込めにしたわけでもないのに。というような、そんなお話があります。

また私もだいぶ時間をオーバーしてます。3人ともすみません、皆さん。ただ、後の時間、ちょっとまだ残ってますので、この後、パネルディスカッションをして、質問を少し受けたいと思います。

ということで、それぞれ、先ほどの西川先生の『虎頭牌』はお酒で失敗する話でしたし、「色」で失敗する話も幾つかありますし、最初の『忍字記』なんて「財」ですし、あるいは「気」、つまり怒りもあります。つまり、「酒色財氣」はほどほどにしたほうがいいよなっていうのを、これらを読んでいたら思うよなというお話でした。ありがとうございます。

では、すみません、続きまして、後藤先生、西川先生、それから平尾先生にもご登壇いただきまして、少しの時間になりますけども、一言ずつでも何かご意見とか質問とか頂きたいというふうに思います。ちょっと1分ほど、壇上の準備をします。

林：皆さん、改めまして、いろんなお話があって、いろんな感想をお持ちになったかなと思うんですけども、早速ですが臨床物語学的な見地から、センター長の平尾先生にまず一言、ご意見でもご質問でもかまいませんので頂きたいと思います。よろしくお願いします。

平尾：いや、ありがとうございます。なんかもう、ドキドキが収まらないというか、今もすごく

ドキドキしながら聞いてました。ほんとに3人の先生方が、それぞれのスタイルで魅力を伝えてくださって、めちゃくちゃ面白かったです。

後藤先生が、まず大まかに枠組みというか、元雑劇の位置付けとか、広く話してくださって、そこでも最後のほうにいろんな具体的な片鱗が見えて、人間ドラマの片鱗ですね。それを次、西川先生が。西川先生の、すごく分かりやすかったです。時空を超えて、それで、ほんとに時空を超えてるから、僕らの知らない世界に触れられるっていう。われわれにとって、物語を体験することで世界が広がっていく感じっていうのもあると思うんですけど。一方で兄弟の絆っていう、まあそれを聞いてると、「ああ、もう今でもそうだよな」と、僕も自分の兄弟を思い出したりとか、周りの兄弟のことを思ったりとか、すごく心に響くなっていう、そういうふうな感じもあったし。最後の林先生に至っては、もうずっと聞いておきたいっていうか、林先生にこんな顔があるんだ。もともとすごくエネルギーのある方というのは分かってますけれども。最後、「酒と仏と男と女、ほどほどに」って、教訓っていうか、もうほんとにそれは思いましたけれども。いや、ほんとに今、人物相関図みたいなものを基に、物語をまさに林節で語っていただいて、すごく心に響くところがありました。

今日、ほんとに後藤先生が最後のところで臨床物語学にすごく引きつけてくださって、ありがたいなと思ったんですけど。臨床物語学研究センターってやってて、やっぱりその物語を通して、僕らが、現代に生きる私たちの生きること、生き方とかも、本質を探究していくっていうのがわれわれの目指してるところですし、それから今日言うてくださったみたいに、時空を超えて、物語として、しかも時空を超えてますから、ある程度、淘汰されてるっていうか、われわれに普遍のもの、共通するものみたいなこと

が、やっぱり、物語の知と呼びたいですけど、物語の知恵みたいなものが、この物語の中に含まれてて、それを通して、われわれが何を受け取っていくかみたいなのところがあって。ほんとに現代を生きるわれわれの世界も、現代は現代のいろんな課題があったり、問題があったりして、われわれも日々、大きな意味でも、それから自分の周りの小さなことでも、心を動かしながら、悩みながら、ドラマの中を生きてるわけですけど。その中で、昔の人たちが同じような、どういうふうに関わって生きていったのかなみたいなことが、物語を通してわれわれが受け止められれば、すごくわれわれのヒントにもなるし、支えにもなるし。そして、「じゃあ今、われわれはどう生きるのか」みたいなことを、すごく今日、大きな支えを得させてもらったというか、そういう感じがいたしましたかね、はい。

林：ありがとうございます。臨床物語学に後藤先生がこんなに引きつけてくださって、しかも臨床物語学だけじゃないんですね。後藤先生、いろんな工夫をしてくださって。皆さん、特にうちの教職員の皆さん、気付かれました？ 後藤先生、ちょっと補足説明をお願いできますか。

後藤：僕から言いますか？

林：はい、お願いします。

後藤：スライドの話ですか？

林：まずスライド。

後藤：僕はちょっと絵心がないものですから、呼ばれた時とかに、どういうふうスライドをデザインしようかなっていうので、よく頭を悩ませるんですけども。最近、「あ、これでええやん」って思ってるのが、その大学のカラー、あるいはデザインとか。これは、ですから京都文教大学の校章っていいですか、あのマークを。これですね。これをモチーフにさせていただいて、使わせていただいています。

林：上から赤、クリーム色、緑ですね。

後藤：そうすると、絵心のない僕でも、なんかそれなりに雰囲気が出ていいかなっていうことです。大体、ああいうのはよく練られたデザインですから、間違いないなっていうことで使わせてもらってます。

林：ありがとうございます。それからもう一つ、実はチャット GPT って、皆さんご存じですかね。ご存じのかたもいらっしゃるし、私は使ったことないんですけども、後藤先生、その辺でちょっと気付かれたことがあるということで。

後藤：気付いたといいますか。臨床物語学っていうのは何なんだろうっていうのを考えた時に、結局、物語の中にずっと、これは淘汰される部分もあるんですけども、淘汰されずに残ってきた感情の表現であったりとか、そういったものっていうのは、やっぱり今の私たちも共感を得ることができると。そうすると、悩んでる人なんか「こういったことが昔からもう変わらず、ずっと伝わっていて、しかも世界中あちこちであるよ」っていうことは、ある意味、普遍的な考え方とか、それこそ支えになったりとか。そういったものを今の悩んでる人なんかにも提供できるんじゃないかっていうようなことを、グローバルな視野から、まず類話っていう、世界中の昔話とか、そういったものを調べることで、もっと深く掘っていけるんじゃないかなというふうに思ってます。それで最近、ちまたで話題のチャット GPT っていうやつですけども、「ああ、そういえば、ちょっと聞いてみよう」と思って。僕は遊びで、ちょっとこういうのを聞くぐらいなんですけれども。例えば、ちょっとこれ、その画面ですけども。すいません。

林：「私は親友と同じ人を好きになりました。どうすれば解決できますか。世界の昔話を利用して解決策を教えてください」と、今、打ち込んでいただきました。

後藤：とか聞いてみると、世界中のそういう似たような昔話をあちこちから拾ってきて、「実は昔は、こういう世界で、こういう土地で、こういうお話があったよ」と、「この人は、こうしたよ」とか、そういったことがもうほんとにインターネットを通じて、いろんな情報が一気に集められてくると。いわば AI のこういう答えっていうのは集合知っていいですか、今はもう一瞬にして、それが拾い集められる。そうすると、例えば何でもいいんですけども、ほんとこういうふうになんか気になったこととか、何か解決したいなとかいう時に、こういった悩み事なんかを相談してみたら、すごくたくさん「今まで世界中で言われてきたような、こんなお話があるよ」って返してくれる。そこから自分のヒントになることってあるんじゃないかなとか。それで、このチャット GPT を使えば、先ほど言っていた世界の類話を、似たようなお話を調べて深掘りしていくっていうのと同じようなことができるのかなと、ちょっと思ったりしてます。だから、これは臨床物語学研究センターにとって、敵なのか味方なのかっていう、そういったところをちょっと。まあ、考えたということです。

林：どうでしょう。平尾先生、一言。

平尾：ぜひ味方にしましょう。

林：ぜひ味方に。ありがとうございます。

平尾：ていうか、もう既に後藤先生が味方な感じがしてますけど。

林：今後とも、うちの、よろしくお願いします。

平尾：元雑劇、出てこないじゃないですか。

後藤：それ、もっと質問の仕方をどんどん具体的に、工夫していけばいいということです。

平尾：中国劇とかにしたら。

後藤：ただ、これ無料版だと、ちょっとやっぱり情報が怪しいところもありますんで。

林：必要なところには「財」が必要なんですね。

すいません、西川先生、これに関連しても、他のことでも結構です。何か一言というか。誰に對してでもいいですけど。

西川：一言。

林：質問か、意見か、感想か。むちゃぶりでですけど。

西川：そうですね。でも、さっき後藤先生がおっしゃったように、やっぱり古典文学っていうのは、昔の人の経験がいっぱい蓄積されていると思いますし、同じ問題にぶち当たっても、作品が変わると対応の仕方が変わってくると思うんです。そうすると、一つの問題に対して、いろいろな解決策を提示してくれるのではないかなというふうに思います。

林：ありがとうございます。すいません、予定の3時にちょうどなるところなんですけれども、もしこの後ご予約がおりの方には、お手元にアンケート回答フォームがありますので、それに、お時間ある時で、今でも結構ですけども、回答いただいて、随時ご退出いただいて結構です。この後、今からですけども、会場のほうで何か言いたいこととか聞きたいこととかある方、ぜひ挙手を頂いて、発言いただけたら、ありがたいなと思います。マイクを持っていきますので、どなたか、いかがでしょう。「時間が来てるから、遠慮」とかなしで結構です。よろしくをお願いします。

桃園：たくさんの発表、ありがとうございました。大学院生の桃園美紅と申します。よろしくをお願いします。私は臨床心理学研究科に所属してるんですけども、全然、臨床心理学と関係ないこと、いろいろ先生の前で話すの、ちょっと気が引けるんですけど。古典とか中国ファンタジーとか、今までそういったものがすごく好きで、読んだりとか見たりとか、『源氏物語』を自分で読んでみたいと思っていろいろ勉強したり、中国文学とか、3人の先生方が書かれた

元雑劇の本も読んだことがあるんですけど。

今、先生方がご説明してくださって、「ああ、なるほど、そういうことか」っていうふうに入ってくるものがあつたんですけど。いざ自分で先生方が書かれた、すごい分厚いんですけども、本を読ませていただいて、なかなか分からないというか、「え、これ、どういうこと？」とか。あの、なんか大きい木のところにいてどうたらこうたらとか、すごいいっぱい書かれてて、その歴史的背景が全然やっぱり分からなかったりとか、中国の文化とか、全然知らない、「これとこれ、言ってることが分からない。この人はどこから出てきたんだ」とかいうことが多くて、なかなか物語に入り込めないってことがあつたんです。そういうのを初学者でも分かるように、どういうふうに読み込んでいけばいいのかっていうのと、もしお薦めの、元雑劇を知るために分かりやすい本とか、初学者がもっと文学の中に入り込めるようなものがあつたら教えてほしいです。以上です。

林：ありがとうございます。中国文学とか全く知らない人にお薦めの本とか、後藤先生、ありますか。

後藤：元雑劇に関しましては、多分、皆無ではないかと思います。それをやろうとしてるのが僕たちなので。しかも、一般向けに元雑劇の本が出たことは多分ないです。なので、より深く知りたいっていうことであれば、研究書の類いは幾つかもちろんあるんですけども、多分、私たちの書いてるものが一番、分かりやすい。

林：それでも難しいって言われるんですけども。

後藤：そうです。だから、非常にもう反省を濃くしました。ありがとうございます。

林：反省しております。

後藤：なので、やっぱりどうしてもわれわれも訳しながら、「ここは何とか読者に分かってほしいよね」とか言いながら、やってるんです。「こ

れはちょっと分からんやろうから、やっぱり注
つけとか」とか。で、その辺の、多分、ずれっ
ていうのも、要するに人それぞれ常識が違いま
すから。当然の部分、当然であるっていう部分
が違うので。なので、非常に貴重な、ありがた
いご意見を頂いたなと思ってまして。もっと手
に取っていただきやすく、分かりやすくしてい
きたいというふうに思います。

一方で、私たちも学者としてやってますから、
何となく格好よくやったりとか、やっちゃいた
くなったりもするんですけども、それを抑えて、
やっぱりより読んでパッと分かりやすいよう
にっていう部分は、ちょっと追求していきたい
なと思ってます。だから、最低限の部分はって
いうところは、なかなか難しいのかな。

林：そうですね。確約はできませんが、もっと
分かりやすい本をいつか、われわれが出せたら
いいなというか、出そうと頑張りますので、よ
ろしくお願いします。ぜひ皆さんも「ここ、も
う全然、分からへんわ」とか「難しいわ」とか
「こうしたらええんちゃうの？」ってあったら、
これ東方書店という書店から出版されてますん
で、東方書店の編集部宛てにどんどんお手紙を
頂けたら、われわれ頑張りますので、よろしく
お願いします。ちなみにですけども、今日お話
した内容のほとんどの作品は『中国古典名劇
選Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』に入ってます。私のレジュメの
最後にも書いてますけども、「名劇選」で調べ
てもらったら、Google 検索したら、すぐ上の
ほうに出てくると思います。よろしく願いし
ます。なんか宣伝になっちゃいました。

平尾：今日の話で、やっぱ共感っていうか、時
空を超えてわれわれの心に響く、共感するの
があるんじゃないかっていう、割とそういう文脈
ありましたけど。でも一方で、今の話もそうで
すけど、時代とか文化が違ったりすることも影
響しながら、何でもこうすんねんみたいな、全然、

違和感を感じたりとか、理解できない部分って、
多分あるんですよね。ちょっと林先生も前の打
ち合わせの時に言ってたけれども、「何で、これ」
と。

林：「何でここ許すの？」とか「何でここで死
のうとするの？」とか。それが多分、文化的背
景を知らない違和感のあるところなんかな。
その辺の説明を、われわれは多分、中国文学を
学んできたから、スッとそれが「あ、ここで死
のうとするのは当然やな」と思ったりするんで
すけども、やっぱりそういう違和感があるところ
を教えていただきながら、ちょっとまた広め
ていけたらと思います。

あ、手が挙がってた方、先ほどいらっしやい
ました。お一方。

小林：京都文教大学の小林と申しますけれども。
大変、面白い話というか、久しぶりにこういっ
たシンポジウムで笑いを得ながら、とても楽し
めたということで、久しぶりの快感を感じまし
た。ありがとうございます、まず。それと、今
の話と、ちょっと私、同じような質問をしよう
かなと実は思ってた。

後藤先生の物語の語りぶりというのは、もし
かして落研出身じゃないかなと思うぐらい、と
ても面白い語りぶり。物語っていうのは、やっ
ぱり物語のストーリーっていうことが中心で、
古典文学が持つ普遍性とか、あるいはっていう
話がメインだったと思うんですけど、語り手と
いうか、語り口というか、それとそれを受ける
聴衆ですよね。だから、いわゆる上演論みたい
なところが非常に重要なんじゃないかなと思う
んです。そこで言うと、やはり今、物語が分か
らないっていう質問があったんですけど、その
分からない部分、平尾先生が今おっしゃったよ
うな分からない部分っていうところを、ちょっ
と私は今、知りたいなと思って、質問をしよう
と思ったんです。つまり、その時代における、

元なり明なりの時代の、どういう聴衆がどのような形でこの物語を享受してたのかって、このところをちょっと教えていただけると、もう少し複線的な理解にたどり着けるんじゃないかと思うので、そこのところを一言教えていただけると、ありがたいと思います。

林：後藤先生、お願いできますか。

後藤：はい。ありがとうございます。今のご質問でいきますと、ジャンルはいろいろ挙げたように、男女の恋物語であつたりとか、歴史ものであつたりとか、そういうのがあるんですが。ちょっとここ、どこかに書いたと思うんですけども、これですかね。この2つ目にある「瓦^{がしや}舎^{かわら}」っていう。「瓦^{がしや}」に学舎の「舎^{かわら}」です。瓦舎と呼ばれる繁華街がありまして。宋の時代、元の時代とかになってきますと、だいたい都市の文化っていうのもかなり華やかになってきて、そうすると、人々っていうのはやっぱり「新しい娯楽、新しい娯楽」っていうのを次々求めていくと。そういう中で、時代が安定してきたところで、大きな、ちょっと豊かな都市になってくると、経済活動の一環でもあるんですけども、こういう瓦舎と呼ばれる繁華街や、そのなかに芝居小屋が造られるようになっていきます。

そういった中で、今言った、今日ご紹介したようなお芝居っていうのを上演するんですが。そのお芝居の中で、例えばここに書いていますが、商人であつたり高利貸しであつたり、あるいは近郊の農民であつたり、富農であるとか、それから主婦、ごろつきまで、もうほんとにたくさんの方が出てくるんです。そういった人たちが登場人物になったり、あるいは主役になったりすると。つまり、そういった人たちが出てくる物語を見て楽しむ人たちがたくさんいるから、経済活動として成り立つわけです。売り上げが出るわけですね。なので、上演ができる

と。ということは、つまりそういった人たちが見に来てはるはずなんです。基本的に瓦舎っていうのは都市部にできますから。

で、都市部に住んでる人っていうのは、ある程度、いわゆる知識がある人たち。日常生活で文字が分かる、あるいは文字を使う人たち。中国の都市部と、それ以外。都市を離れたら、田舎のほうの近郊の部分とか辺ぴな土地とか、そういったところにも、もちろんいっぱい農村があつてたくさんの人々が住んでるわけですけども。実は町中の瓦舎と呼ばれる芝居小屋で、さっき紹介したように上演されてた元雑劇っていうのは、かなり上級な部類のもので、そのまま聞いて、ほんとに当時の人、どこまで分かってたのかなって。特に歌詞の部分なんですけども、これなんか、僕たちが、もちろん僕たちの不勉強もあるんですが、今その歌詞を読んで、「これ、何言ってるのかな」とか「これは元ネタ何やろな」とか、やっぱり分からないことがまだまだあつたりする。当時の、いわゆる通な人たちは、お客さんの中でもそういうの、すごい楽しんでたと思うんですけども、絶対分からない人もいたんだろうなと思うんです。

じゃあ近郊、町中じゃなくて、田舎のほうで上演されてたお芝居っていうのはどういうのかっていうと。これ、そもそも、もう形式からして違うんです。歌詞の部分が違う。もちろんお話の内容に関しては、有名なお話や、いろんなものが作られてるんですけども、もっと単純なお芝居が実は上演されてるんです。そういったものも、かなりずっと長らくの間、伝わってきてるっていうのはあります。ただ、そういったものっていうのは実は、ちょっと言い方はあれですけど、そういう田舎で上演される物語のお芝居っていうのは、口頭で演者から演者に伝わっていった、そういうものなんです。なので、まずテキストとして残っていないっていう。

フィールドワークとかに行き、聞き取り調査をして、「この村では、こういうお芝居が上演されてるよ」と、「これは実はこの都市でやってる、このお芝居と同じような内容だよ」とか、そういった形になったりします。芝居そのもの、上演されてるものそのものが違うという。だから、そういう田舎で聞いている人たちは、もちろん日常生活で文字を使わない人ですから、もう耳で聞いて分かることがとにかく大事。なので、歌詞の内容なんかも非常に単純で分かりやすい内容になっています。

そういう意味では、都市部と農村っていうところで、実はやることがちょっと違うっていう。都市部で、今紹介したようなやつを聞いている人たちは、かなりある程度の知識があった人たちがそれを聞いて、「あ、今の、うまい言い回しやな」とか、そういうのを楽しんでたんじゃないかなと。で、僕たちが紹介してるのが、その都市部でやってた、ちょっと知識のある人たちが享受してたお芝居の翻訳なので、当時、聞いてた人たちは、先ほど質問で頂きましたけども、そもそもが、そういう基本的な知識は当然、身に付けた人たちが聞いてると。なので、そこが僕たちの配慮が足りないっていうところで、今後は気を付けたいなっていうところです。とにかく都市部と農村って、結構、実は聞いてた人も見てた人も違う、上演してたものもちょっと違うっていう、そういう側面があります。

林：ありがとうございました。日本の古典劇というと、能狂言とか歌舞伎とかありますけども、能狂言と歌舞伎のもともとの享受者の身分といえますか、それが違ったとも言われてますけども。狂言は面白おかしい話ですが、能の謡うたいを聞いて分かるかなとか、歌舞伎でもやっぱり長唄のところは、そのまま聞くだけでは分からない。でも、役者の立ち回りであったりとか、化粧で

あったりとか、その格好よさを見に来てワーってなったのが、元雑劇の聴衆・観衆にもあったんじゃないかなって、これも分かんないですけど、想像はしてるところです。

すいません。もう15分ほどオーバーしておりますので、またこの後、少し部屋を移しまして、まだわれわれ少しおりますので、アフタートークという形で、質問とかおありの方はぜひ一緒に行きましょう。

後藤：1個だけ追加で。

林：はい。

後藤：先ほどの追加なんですけど。当時の田舎者が街なかのこういう瓦舎に入って、もう右見ても左を見ても何も分からないっていう、田舎者丸出しのお上りさんっていう、その姿を笑った元曲なんかもあるんです。だから、それぐらい格差が実はあったんだっていうことです。

林：ありがとうございます。では、すいません、最後に平尾センター長から締めの一言を頂ければと思います。よろしくお願いします。

平尾：いや、このまま終わるのが惜しいです。まだ1時間ぐらい、やれそうな感じがありますけど、時間が来ましたので。ほんとに今日は、林先生の渾身の企画でしたし、それから後藤先生、西川先生、わが大学、そして物語学研究センターにお越しいただいて、ほんとにありがとうございました。ほんとに今日のお話、参加して下さった皆さんもそうだと思いますけど、すごく視野が広がって、あとやっぱ深くなるっていうのかな。世界が広がるだけじゃなくて、われわれの深いところに響くというか、動かされる感じがあるので、今日は皆さん、いい夢を見てくださるんじゃないかなと思っております。ありがとうございました。

林：ありがとうございました。

それでは、あ、掲示されている『中国古典名劇選』、ぜひ、カートに入れてください。よろ

しくお願いします。

アンケート、QR コード等でコメントを頂ける方は、ぜひスマホとかパソコンからお願いします。ちょっとできないっていう方、裏が紙のアンケートになっていますので、こちらに、記入いただけたところだけで結構ですので、記入いただいて、係の者に渡していただければと思います、入り口のところで。

それでは、本日のシンポジウム、「中国古典劇にみる物語と人間ドラマ～元雜劇の魅力に迫る～」を、これでいったん閉じたいと思います。足元の悪い中、皆さま、ありがとうございました。そして先生方、どうもありがとうございました。